梓久保金山遺跡B地点
発掘調査報告書

川上村教育委員会
川上村文化財保護委員会

梓久保金山遺跡Ｂ地点
発掘調査報告書

川上村教育委員会
川上村文化財保護委員会

序

この度、『梓久保金山遺跡Ｂ地点発掘調査報告書』が刊行されるにいたりました。川上村は千曲川の源流であり、標高1100mを越える高冷地であります。川上に生きた人びとはこの条件の中、様々な歴史を刻んできました。その一つとして「川端下千軒・梓千軒」といわれる伝承が古くから残っており、金山の開発がなされたことを示すものとして注目されてきました。しかし、その内容や実態は断片的に把握されるだけの状況でした。近年になり、『川上村誌』資料編の相次ぐ刊行により江戸期の金山開発について把握され、村内の磨り臼などの研究も進められるようになりました。このような動向の中、史料の少ない江戸期以前の状況や金山開発の開始時期の問題などを明らかにするため村内の発掘調査による考古学的な研究が必要とされ、川上村文化財保護委員会の調査研究事業として進められています。

今回の発掘調査により、多くの鉱石粉砕具とともに陶磁器片や銭貨などが出土し、この調査地点については、その時期が16世紀末から17世紀初めにかけてであることが理解できました。また、山梨県の黒川金山との関連性がうかがえる点は、この後の村内ばかりではなく、近世の黎明を明らかにする一助となるのではないでしょうか。

しかしながら、村内にはこの地点のような場所が多く残されており、今後の調査が望まれるところでありますので、この調査報告書が多くの方々に活用され、川上村における金山研究の第一歩となれば幸いです。

末筆となりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解いただきご協力いただいた多くの皆様や関係機関に心より御礼申し上げます。

平成20年３月１日

川上村教育委員会

教育長　中島幸裕

例　　言

1　本報告は、川上村における金山関連遺跡の内容確認を目的として実施した長野県南佐久郡川上村大字秋山52－1内に所在する梓久保金山遺跡Ｂ地点の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、川上村文化財保護委員会の調査研究事業として川上村教育委員会が、平成15年度から平成18年度にかけて実施した。

3　本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の25000分の１地形図（居倉）（金峰山）及び50000分の１地形図（金峰山）、川上村発行の基本図をもとに作成した。

4　本書は、川上村教育委員会の責任の下、長﨑治が執筆し編集を行った。

5　本調査にかかわる記録及び出土遺物は、川上村教育委員会が保管している。

6　本調査、報告書作成にあたり、下記の方々にご指導・ご協力を得ている（敬称略・五十音順）。
網倉邦生・市川隆之・宮里学・秋山林野保護組合・旧塩山市教育委員会

凡　　例

1　図中の方位は磁北である。

2　本書に掲載した実測図は、原則として下記の通りである。その他の場合は図版中のスケールを参照していただきたい。
遺物分布図１：100　鉱石粉砕具１：10　陶磁器、土器、銭貨、銅・鉄製品類１：２

本文目次

序文
例言・凡例
本文目次
第１章　発掘調査の概要……1
　第１節　調査の経過と概要……1
　　１発掘調査に至る経緯……1
　　２調査組織……1
　　３調査期間……2
　　４調査の経過……2
　　５調査成果の概要……3
　第２節　遺跡周辺の環境……4
　　１遺跡の地理的環境……4
　　２遺跡の歴史的環境……4
第２章　調査の方法と成果……9
　第１節　調査の方法と層序……9
　　１発掘調査・整理の方法……9
　　２出土遺物の分類の基準……9
　　３基本層序と微地形……9
　第２節　遺物分布と出土遺物……13
　　１遺物の分布……13
　　２鉱石粉砕具……13
　　３陶磁器・土器……25
　　４銭貨……26
　　５銅製品……27
　　６鉄製品……28
　　７その他……28
第３章　考察……30
　第１節　本遺跡の鉱石粉砕具について……30
　　１鉱石粉砕具について……30
　　２本遺跡の磨り臼・磨り石について……32
　　３本遺跡の凹み石について……33
　　４本遺跡の挽き臼について……35
　　５まとめ……35
　第２節　他遺跡との比較と稼業時期……35
　　１黒川金山遺跡・湯之奥金山遺跡との比較……35
　　２本遺跡の稼業時期……36
　第３節　まとめと今後の課題……37

引用参考文献
写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……5
第２図　調査区の位置とその周辺……6
第３図　調査範囲と地形……10
第４図　遺物分布図……11・12
第５図　挽き臼実測図……14
第６図　磨り臼実測図……15
第７図　磨り石実測図……18
第８図　凹み石実測図……21
第９図　凹み石・その他鉱石粉砕具実測図……22
第10図　陶磁器・銭貨・銅製品等実測図……26
第11図　粉砕過程と鉱石粉砕具……34

挿表目次

第１表　文献からみる川上村鉱山開発一覧表……8
第２表　出土挽き臼（下臼）観察表……14
第３表　出土磨り臼観察表……16
第４表　出土磨り石観察表……18
第５表　出土凹み石観察表……23
第６表　出土その他鉱石粉砕具観察表……24
第７表　出土陶磁器・土器類観察表……25
第８表　出土銭貨観察表……27
第９表　出土銅製品観察表……28
第10表　出土鉄製品観察表……28
第11表　その他出土遺物観察表……29
第12表　黒川金山遺跡・湯之奥金山遺跡との比較……36

写真図版目次

ＰＬ１　遺跡遠景・遺物出土状況
ＰＬ２　遺物出土状況・調査地遠景
ＰＬ３　遺物写真（挽き臼・磨り臼）
ＰＬ４　遺物写真（磨り石・凹み石）
ＰＬ５　遺物写真（凹み石・その他鉱石粉砕具・砥石・鉱滓・ゆり滓）
ＰＬ６　遺物写真（磁器・陶器・土器）
ＰＬ７　遺物写真（銭貨・煙管・銅鉄製品）

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査の経過と概要

１　発掘調査に至る経緯

村内には多くの金属鉱物があることが確認され、昭和の初め頃まで、金属類の鉱山が経営されていた。また、『川上村誌』民俗編にも示されているように、古くから「川端下千軒、梓千軒」の伝承が残り、坑道跡の存在や、金山とのかかわりを示す古文書や鉱山臼類の存在は、村内において金山の稼業を示すものとして、以前から注目していた。しかし、稼業の開始時期やその内容など未知なる部分が多いままとなっていた。

一方、山梨県においては1980年代に黒川金山や湯之奥金山などの金山関連遺跡が調査され、稼業時期や道具類の位置づけ、金山衆の動向など、大きな成果を生み、金山関連遺跡が注目されるようになった。そして、その研究は村内へも波及し、村内で採集されていた臼類が、山梨県調査資料と対比され、山梨県側との関連の強さが指摘されるようになった。そのような中、平成４年度（1992年度）の川上村文化財保護委員会の調査研究事業により、川上村秋山梓久保地籍において、テラス群の中から釘や陶磁器などを検出し、村内における金山関連遺跡研究の端緒を開いた。また、その後の踏査により、梓久保地籍内の梓川沿いで鉱山に関係すると思われる臼が露出している地点を幾つか確認することができた。さらに、古文書からの研究（島田1995）も行われるとともに、『川上村誌』資料編の相次ぐ刊行による村内史料の充実化が図られ、近世における川上の金山開発について把握されつつある。

このような状況の中で、村内の鉱山に関係する場所が特定されつつある点や、山梨県での研究成果の蓄積は、村内資料の検討を可能にし、大きな刺激を受けることとなった。そして、平成14年10月16日の文化財保護委員会の会議において金山関連遺跡の研究が話題となり、村内においても調査を進めることが確認され、来年度から開始することが決定された。そして、平成15年４月18日の文化財保護委員会の会議において、まず、挽き臼が採集された地点の踏査を行うこととなった。踏査は、４月20日に実施し、採集者同行のもと採集された場所を確認し、古文書にみられる地獄谷といわれる場所との想定がなされた。しかし、この場所は調査範囲が広範囲におよび、文化財保護委員会による発掘調査は困難であるとの結論に至った。そして、10月15日の会議において、以前からの踏査により確認されている川に近い場所で磨り臼が露出しているテラス状の地点が候補地となった。この地点は、範囲が小規模で一つにまとまったテラス状地形のため、調査範囲も絞りやすいこともあり、発掘調査が可能であることが判断された。そして、調査の目的を金山関連遺跡の解明と村内における金山遺跡の内容と時期の究明、今後の調査・研究のための基礎資料を得ることとし、発掘調査を実施することを決定した。そこで、11月から川上村文化財保護委員会の調査研究事業の一環として、川上村教育委員会が実施することとなった。

２　調査組織

発掘調査から整理作業及び報告書刊行にいたるすべての業務は、川上村教育委員会と川上村文化財保護委員会が行い、調査組織は次の通りである。

平成15年度（2003年度）

事　務　局　由井清幸（教育長）・井出茂夫（教育振興課長）・長﨑治（教育振興係）
調査担当者　長﨑治
調　査　員　中島美喜衛・林市四郎・川上憬・林岩・上田貢・原好正・由井港・由井幸憲
由井和水・吉沢靖（以上文化財保護委員）

平成16年度（2004年度）
事　務　局　由井清幸（教育長）・井出茂夫（教育振興課長）・長﨑治（教育振興係）
調査担当者　長﨑治
調　査　員　中島美喜衛・林市四郎・川上憬・林岩・上田貢・原好正・由井港・由井幸憲
由井和水・吉沢靖・由井雅彦・由井満（以上文化財保護委員）

平成17年度（2005年度）
事　務　局　由井清幸（教育長）・吉沢正久（教育振興課長）・長﨑治（教育振興係）
中島幸裕（教育長／10月から）
調査担当者　長﨑治
調　査　員　中島美喜衛・林市四郎・川上憬・林岩・上田貢・原好正・由井港・由井幸憲
由井和水・吉沢靖・由井雅彦・由井満（以上文化財保護委員）・渡辺宗助

平成18年度（2006年度）
事　務　局　中島幸裕（教育長）・吉沢正久（教育振興課長）・長﨑治（教育振興係長）
調査担当者　長﨑治
調　査　員　林岩・由井雅彦・林市四郎・川上憬・上田貢・原好正・由井港・中島美喜衛
由井幸憲・由井和水・吉沢靖・由井満（以上文化財保護委員）・渡辺宗助

平成19年度（2007年度）
事　務　局　中島幸裕（教育長）・吉沢正久（教育振興課長）・長﨑治（社会文化係長）
調査担当者　長﨑治

3　調査期間

発掘調査は平成15年11月14日に着手し、平成18年11月10日に一応の終了をみたが、発掘調査実数は11日間と短いものである。文化財保護委員会の事業であり、農閑期の春先と晩秋のみしか発掘調査を行う機会がないためであり、90㎡の範囲を多年度にわたり調査を行う結果となった。また、整理作業及び報告書作成は、社会教育・公民館事業などの他業務の合間をみて行い、時間単位の作業で集中的な期間を設けて行うことができなかったが、平成15年度の発掘調査終了後から毎年少しずつ実施した。発掘調査の実施日及び整理作業・報告書作成期間は以下の通りである。

発掘調査実施日　　平成15年度：平成15年11月14日・11月21日・12月２日
平成16年度：平成16年５月24日・５月26日・11月４日
平成17年度：平成17年５月６日・５月19日・11月４日
平成18年度：平成18年10月25日・11月10日
整理作業及び報告書作成期間　　平成15年12月３日～平成20年３月15日

4　調査の経過

平成15年11月14日に発掘調査を開始する。まず、磨り臼の露出している部分から西側の川に向かい任意

であるが、南北3.5m・東西4.7mほどのトレンチを設定して、表土をはがす。磨り臼の露出している側と川側においては堆積が浅く、10cmほどで黒色土が除去され地山となった。トレンチの中央部付近は多少窪んでいる感があり、そこより、磨り臼２点を検出し、その２点は接合することが確認された。また、トレンチ東から１点の磨り臼の検出があった。この窪みからは、水晶片や石英片が多数検出され、また、大小様々な石が見られた。11月21日、引き続きトレンチ内の発掘を行い、鉱石粉砕具類を検出する。また、銅製品１点の出土があった。これまで、出土した遺物、水晶片はくぼ地を中心に出土したものの、くぼ地に人工性は感じられず、自然地形に不必要品を投げたものと判断した。12月２日は長崎治、嶋崎和彦により出土状況図の作成などを行い、本年度の作業は終了とした。

平成16年度は、４月28日の会議において発掘調査の継続を決定し、５月24日に発掘調査を再開する。前年度の遺物分布や地形を考慮し、トレンチを南側に広げることとし、掘り下げを行った。前年度の鉱石粉砕具の集中地点を離れるにしたがい、陶器片、煙管が出土するようになる。５月26日は、掘り下げを継続し、砥石、鉱滓などの出土があった。秋となり11月４日に発掘調査を再開し、これまでの調査範囲の北側で微地形的に高くなる平坦部への拡張に着手する。鉱石粉砕具が減少し、土器片、銅製品などが目立って出土する。

平成17年度となり、４月19日の会議において発掘調査の継続を決定する。５月６日に発掘調査を再開し、調査範囲を更に西側へ拡張し、陶器、土器、煙管などを検出する。５月19日、発掘調査を継続し、銭貨11枚が一箇所に集中して出土する。鉱石粉砕具の出土が減少する。11月４日、発掘調査を再開し、西側への拡張を行う。陶器片が出土し、特に鉱滓の出土が目立つようになる。また、北側に向かい遺物の出土量が少なくなる感じを受けた。

平成18年度は10月17日の会議において発掘調査の継続を決定し、10月25日に発掘調査を再開する。前年度の調査範囲をさらに西側へ拡張する。川側の西端において本遺跡で最初の出土となる挽き臼を検出する。しかし、西南側に向って遺物量は減少する傾向であった。また、西端の凹みのある巨大な石の近くの石を精査したところ、挽き臼を検出した。11月10日、前回部分の続き及び挽き臼周辺と調査範囲の精査を行う。テラスの中心部をほぼ完掘し、更なる拡張も困難で、周辺部では出土遺物も減少するため、この日をもってこの地点の調査を一区切りとすることを決定する。

整理作業及び報告書作成は、平成15年12月３日から開始し、遺物の洗浄、注記、実測を行い、平成20年３月15日まで、報告書作成を行った。

５　調査成果の概要

合計11日間の調査で、遺構の確認はできなかったが、磨り臼、凹み石、磨り石などの鉱石を粉砕するために必要な石製の鉱石粉砕具とともに、陶磁器や煙管、銭貨などを検出した。また、挽き臼が２点検出され、磨り臼、凹み石の量が多いなど、特徴的で良好な資料を得る事ができた。年度ごとにみると採集資料を含めて平成15年度に23点、平成16年度に51点、平成17年度に48点、平成18年度に17点の遺物を検出した。調査面積及び分類別の点数は次の通りである。

調査面積：90㎡

検出遺構：なし

出土遺物：磨り臼：15点　凹み石：25点　磨り石：17点　挽き臼２点　その他鉱石粉砕具：４点
陶磁器：16点　土器：16点　煙管：６点　銅製品：８点　銭貨：15点　釘：１点
鉄製品：２点　砥石：１点　鉱滓７点　ゆり滓：４点　　合計：139点

第２節　遺跡周辺の環境

１　遺跡の地理的環境

遺跡は千曲川の支流である梓川の中流部に位置し（第１図）、遺跡の対岸に長峰（2065m）、南方に国師ヶ岳（2592m）、南東に甲武信ヶ岳（2475m）などの山々に囲まれている。周辺は長峰と五郎山に挟まれた間を梓川が流れる谷地形で、所々に平坦部が形成されている。また、両山とも斜面部に沢等による侵食を受け、小規模な谷地形を形成し小規模な平坦部が点在する。遺跡の標高は1500m前後で、梓川の浸食により形成された小規模な段丘状の平坦部にあり、周辺にも多くの平坦面が形成されている。

川上村は、明治30年代に保科五無斎による踏査で電気石が発見され注目を集めたのを初め、近年の山中忠夫氏らの調査でも20種以上の鉱物が知られており、水晶の日本式双晶が産出するなど、鉱物に恵まれた地域として知られ、現在、村内において50数種類の鉱物が確認（原田2003）されている。

地質的な構造は、川上天狗山秩父古成層帯、川上中生層群帯、高登谷中生層帯、金峰山花崗岩帯からなる（川上村誌刊行会1992）。遺跡に近い鉱脈は、対岸の長峰山麓にあり、川上中生層帯に属している。この一帯からは、柘榴石や水晶の良好な結晶が産出する。

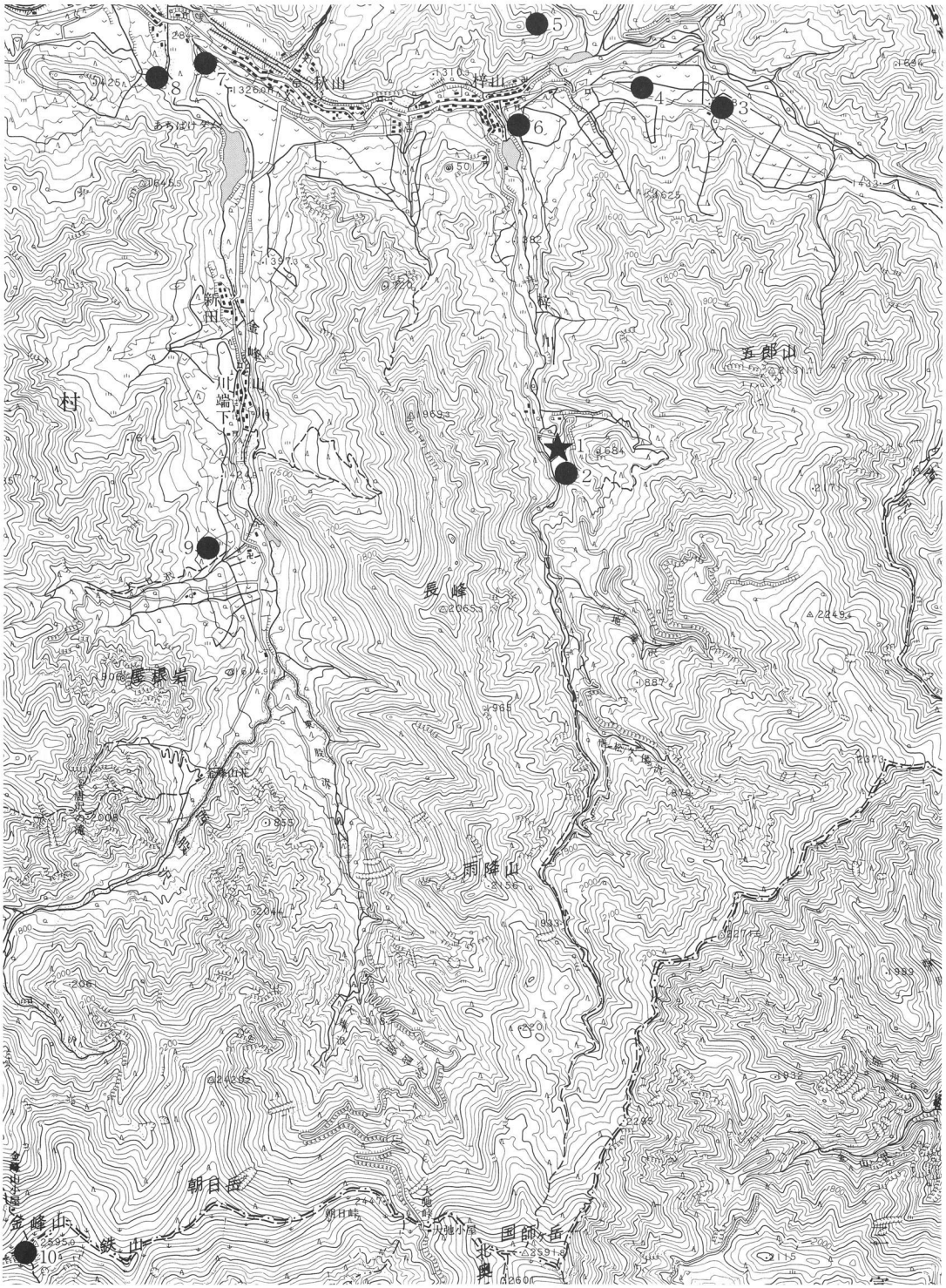
金鉱脈の研究も進んでおり、金属鉱山研究会の活躍がめざましい。鉱床は堆積岩がマグマの貫入によりマグマに接近した部分が熱変質を受けて成分に交代作用が起こりできるスカルン鉱床で、遺跡のある長尾周辺は、梓山・山神・国師の三つの鉱床からなる。国師鉱床には、灰鉄輝石、灰鉄ざくろ石、珪灰石が累帯する部分の中にホセ鉱Ａ、輝蒼鉛鉱と共存する。また、山神鉱床は上部に石灰岩がスカルン化した大理石の岩体が露出し、その辺縁下部に酸化帯があり、その褐鉄鉱の中に金が含まれる（原田2006）。このような研究成果があり、今後、金鉱石と鉱石粉砕具の関係を考えていく上でも重要なものである。

２　遺跡の歴史的環境

遺跡の周辺には、戦場ヶ原Ａ遺跡などの旧石器時代の遺跡や赤谷遺跡などの縄文時代の遺跡、平安時代のしだみじゅく遺跡などが点在する（第１図）。また、長峰の西側の川端下地区においては、金峰山信仰関連の遺跡があり、平成５年から調査された金峰山修験道遺跡や金峰山山頂遺跡などが位置する。この遺跡においては、16世紀中頃から17世紀前半の陶器が出土しており、修験者と金山の係わりを検討していく上で貴重な資料を提供いている。

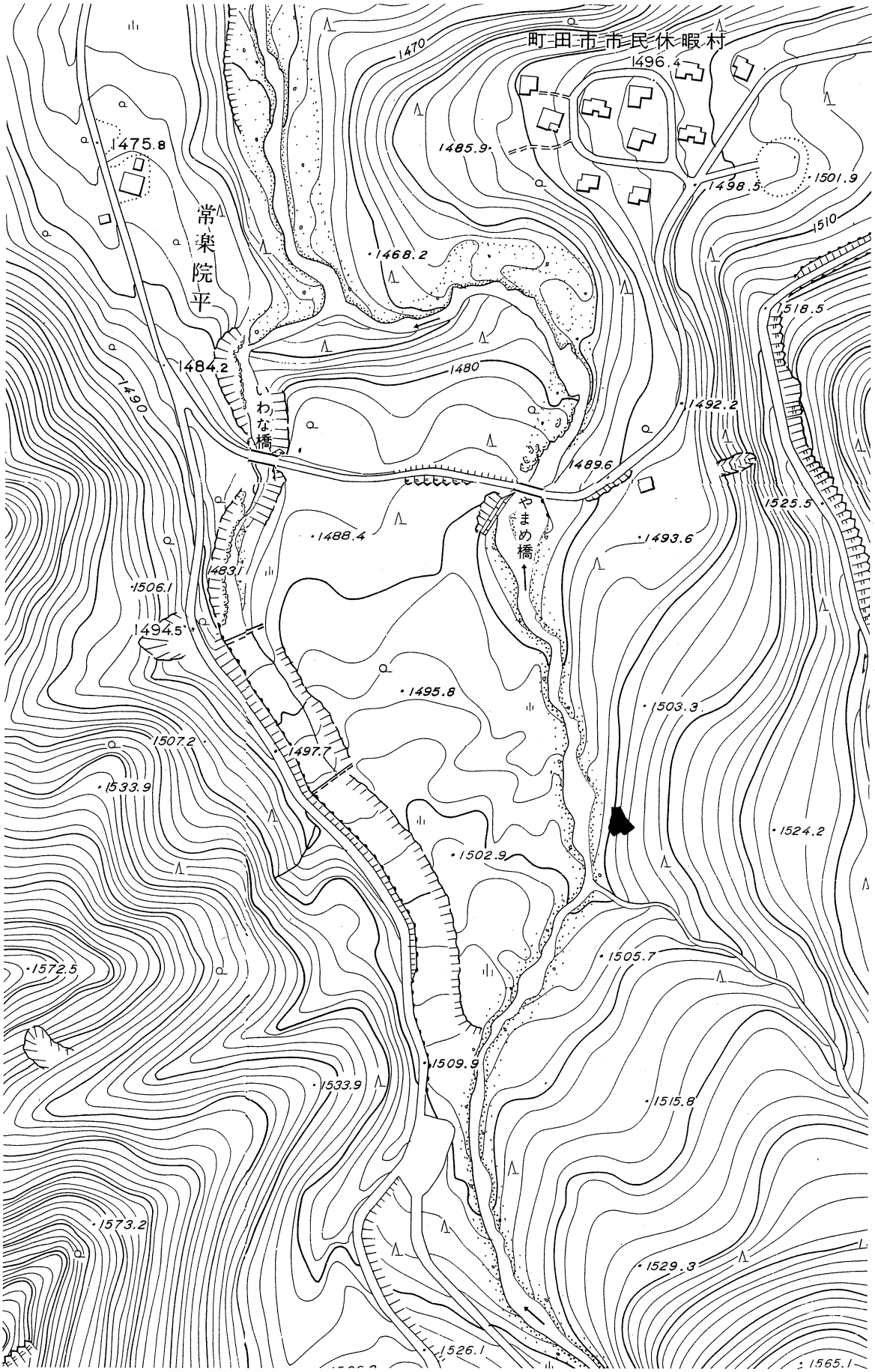
金山に関連する部分を検討していくと（第２図）、古くより「梓千軒、川端下千軒」との伝承があり、山梨県と境を接する本村において、名目平、長尾山で武田晴信により始められたといつしか語られるようになった。遺跡の付近には坑道や、試し掘りした小穴が数多くあることが知られており、本遺跡の対岸、長尾にその多くがある。本遺跡はアオガネという地名が伝えられている。遺跡の対岸が地獄谷と推定され、鉱山臼が発見されており、谷上部に坑道があることが知られている。その北側が名目平と推測されている。さらにその北には、常泉坊の墓碑が残る場所とともに常楽院平と呼ばれる地名が残り、寺院の存在を示し、大規模な鉱山経営の推測を可能とする。また、遺跡の100mほど南には比較的広い平坦地形があり、テラス状の地形が点在する。そこは、平成４年に文化財保護委員会が調査を行い、石積のあるテラス状の場所から釘、陶器片等の出土があり、本遺跡との関連性について検討すべき点である。尚、陶器片については、調査当時、愛知県立陶磁器資料館で鑑定され、16世紀半ばから17世紀初頭の製品とされている。

史料的にみていくと（第１表参照）、享保５年（1720年）の梓山村明細帳に「金山之義　名目と申山年数慥ニ知レ不申　其後天正年中ニ長尾と申所ニ而　山金見出し稼申節ハ　当国小諸　仙石兵部守様知行



1．梓久保金山遺跡Ｂ地点　　2．梓久保金山遺跡　　3．戦場ヶ原Ａ遺跡
4．戦場ヶ原Ｂ遺跡　　5．赤谷遺跡　　6．上の原遺跡　　7．村木遺跡
8．しだみじゅく遺跡　　9．金峰山修験道遺跡　　10．金峰山山頂遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区の位置とその周辺（１：2500）

所ニ而　金彫共之小屋　千軒余御座候ニ付…」（川上村誌刊行会1996）とあり、金採掘の開始が天正年中（1573年～1591年）より前であることをうかがわせ、千軒伝承も見出すことができる。尚、仙石氏の所領期間は天正18年（1590年）から元和８年（1622年）の32年間である（南佐久郡誌刊行会2002）。また、『秋山村史』（川上1979）には、明治３年の常楽院の神社書上として「…永禄より慶長の間梓山の奥、名所なめヶ平より金出で候につき、其の砌金安全…」とあり、また、文化６年の梓山明細帳として「金山長尾山・名目は文禄・慶長・元和の頃、大成御座候由伝え参り候」といい、金採掘の開始が永禄年中（1558年～1569年）にまでさかのぼる可能性を示唆している。また、同書には、享和３年（1803年）の常楽院文書として「慶長二丁酉年より　当山黄金湧き出で　繁栄に付き先達仕り候」（川上1979）とされ、慶長２年（1597年）に金が採掘され繁栄した事をうかがわせ、元和８年（1622年）12月の佐久郡高書上帳（信濃史料刊行会1965）に「金山場所之事　あつさ山家数廿九間　川端下山同十間　但シ丑年より以来10ヵ年金出不申候」とあり、元和８年から10年前の丑年にあたる慶長18年（1613）頃に金が採掘されなくなったことがうかがえる文書であり、それ以前から金山としての稼業が行なわれたことを示している。以上の文献からは、天正期もしくはそれ以前に開始された事を推測でき、慶長期に繁栄し、以後衰退したとみることができる。

以後、江戸期には何度かの採掘を示す史料が残り、延享３年２月の長尾名め金山掘由来書上（川上村誌刊行会1994）によると、承応３年（1654）から３ヵ年江戸の牛山角兵衛が長尾・名めの両山の古布間歩を普請し少しずつ金筋にあたるが、江戸奉行より留山となり、封印もされる。明暦年中（1655～1657）には江戸町人の坂倉九郎治を元締とする江戸の定閑が稼業する。寛保２年（1742）には江戸の徳田又左衛門が７月から10月まで試みる。延享２年（1745）には江戸の柳橋善五郎が梓山金山の間堀を願い出ている。また、最も大きく稼業が行われたのが、享和元年（1801）から文化６年（1809）の幕府直営によるもので、梓山に御番所を設け、水車も利用するなど梓久保地獄谷金山、川端下長尾金山をはじめ村内の大深山船久保鉛山、居倉横築地銀山の稼業も同時に行われた。これらは、梓山・川端下長尾金山日記（川上村誌刊行会2000）に詳しく記されている。以後、天保13年（1842）、弘化２年（1845）にも稼業がなされた事をうかがい知れる文書が残る。

明治以降は、昭和10年代になると東京や大阪の業者が入り、金峰鉱山（金・鉄）、長尾鉱山（金）、秋山鉱山（マンガン）、所並鉱山（マンガン）、梓山鉄山（磁鉄鉱）、大深山鉱山（鉄･銅･亜鉛）が経営された。その後、昭和25年には甲武信鉱山として住友金属が金、銀、鉄を採掘した。

遺跡の周辺では、古文書によれば、伝承的な部分を含んでいるものの金山開発が永禄年間までさかのぼることが可能であり、天正後半から慶長２年頃の間が最盛期で、慶長18年頃には衰退し始める様子がうかがえる。そして、江戸期から昭和の初めまで、度々、金や銀、銅、鉛などの鉱物を求め、鉱山として稼業された。

第１表　文献からみる川上村鉱山開発一覧表

開発年代		西暦	開発者	鉱山名					
				川端下	梓久保地域	梓山	秋山	大深山	居倉
戦国期	永禄年間？	1558〜1569	武田晴信配下？	長尾山？［金］ 伝承	なめヶ平［金］ 秋山村史（原本不明）				
	天正年中	1573〜1591	武田勝頼配下？（天正10年まで） 徳川氏配下？（天正17年まで）		長尾［金］ 享保５年梓山村明細帳				
江戸期	（天正18年〜元和８年）	1590〜1622	小諸城主仙石氏所領下	川端下山［金］ 元和８年佐久郡高書上帳	なめ・長尾 宝暦３年金山御運上吟味差上一札			馬越沢［金・銀・銅・鉛試掘］ 宝暦３年鉱山吟味ニ付差上書	
	承応３年〜明暦２年	1654〜1656	牛山角兵衛（江戸桶町）		長尾・名目（梓山秋山入会）［金］ 延享３年長尾名め金山堀由来書上				
	明暦年間	1655〜1657	定閑・板倉九郎治（江戸）		長尾・名目？［金］ 延享３年長尾名め金山堀由来書上				
	寛文７年	1667	杉田次郎兵衛					鉛山［鉛］	
	寛保２年	1742	徳田又左衛門（江戸横山町）		梓山□□［金］ 延享３年長尾名め金山堀由来書上	小袋岩（梓山秋山入会）［銀］ 南佐久郡誌近世編			
	延享２年	1745	柳橋善五郎（江戸表両国）		梓山金山［金］ 延享３年長尾名め金山堀由来書上			大深山金山［金］ 延享３年長尾名め金山堀由来書上	
	宝暦２年	1752	金山司忠左衛門			小袋岩（梓山秋山入会）［銀］ 宝暦２年小袋岩銀山間堀願			
	天明５年	1785	弥惣治、惣兵衛（江戸浅草）						横築地［鉛］ 天明５年（1785）横築地鉛山間堀願
	享和１年〜文化６年	1801〜1809	幕府直轄	長尾山［金］ 享和元年〜金山日記等	梓久保地獄谷［金］・長尾那免平［金・銀］ 享和元年〜金山日記等			船久保金山［金・鉛］ 享和元年〜金山日記等	横築地銀山［銀］ 享和元年〜金山日記等
	文化７年	1810	市之丞（川端下）	長尾金山［金］ 文化７年金山間堀證文					
	天保13年	1842	金山師元締川原善九郎		長尾金山（梓山秋山入会）［金］間堀願い 天保13年梓山御触状書留帳				
	（弘化１年）	1844	弥源次（梓山）		梓山？の金山［金］ 弘化２年金山諸品代弁済願				
近代	明治２年	1869	左金次（秩父小鹿野村）平一郎（居倉）					ぬたの窪［銅］	
	昭和10年代	1935〜1944		金峰金山［石灰］			秋山鉱山・所並鉱山　マンガン	大深山鉱山［鉄・銅・亜鉛］	
	昭和11年	1936	参松鉱業【小川雄逸】（大阪）		金峰鉱山［金・鉄］	梓山鉄山［磁鉄鉱］			
	昭和11年頃	1936	金峰鉱業所【有吉喜兵衛】（東京）	長尾鉱山［金］					
	昭和24年	1949	住友金属鉱山		甲武信鉱山［金・銀・鉄鉱］	梓山鉄山［磁鉄鉱］			
	昭和27年	1952	鹿島建設（住友金属下請け）		甲武信鉱山［金・銀・鉄鉱］	梓山鉄山［磁鉄鉱］			

日本金山誌編纂委員会『日本金山誌』・川上村誌編纂委員会『川上村誌』・南佐久郡誌編纂委員『南佐久郡誌』・信濃史料刊行会『信濃史料』を基に作成

第２章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法と層序

１　発掘調査・整理の方法

発掘調査は、露出している磨り石と地形を考慮して任意にトレンチを設定し、遺物の分布などから拡張を行う形で進めた。出土遺物については、№１からの通し番号を付し、出土位置を平板により、記録した。また、水晶片、石英片等については一括して取り上げた。

遺物の注記については、遺跡名の文字とＢ地点を表す「AZU-B」とし、取り上げ時の通し番号を注記した（例：AZU-B-001)。金属類など注記の困難なものについては、小形ビニール袋に収納し、袋に遺跡名と取り上げ時の通し番号を記入した。

遺物の実測については、磨り臼、凹み石、磨り石などの大形品は写真を援用した測図を行い、他のものについては、通常の実測を行った。これら実測、トレース、写真撮影の全てを長崎が行った。また、陶磁器片、土器片の時期などについて、長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏の指導を受けた。

２　出土遺物の分類の基準

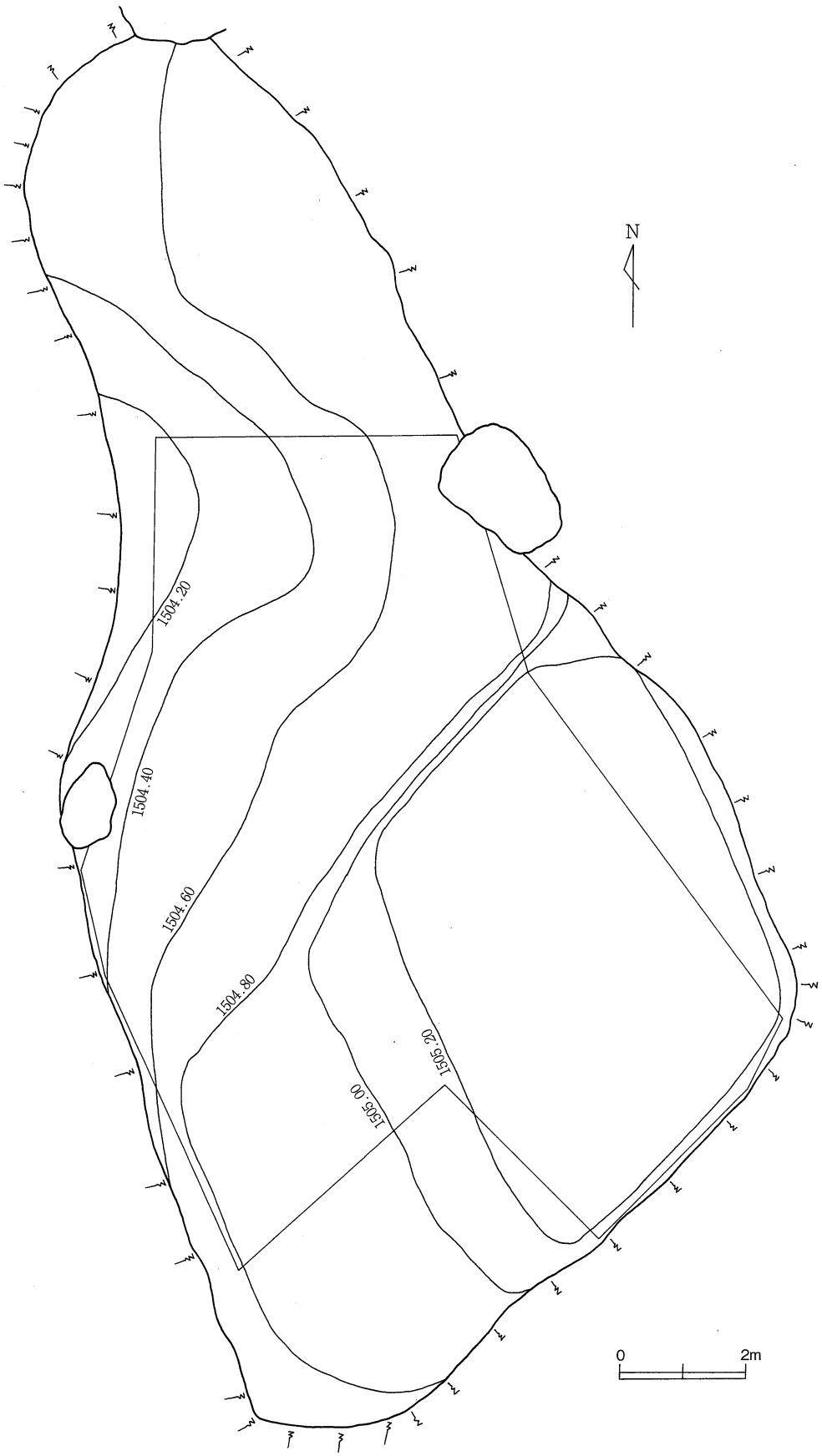
長野県内では鉱山に関係する遺物は少なく、特に石製の道具類は土器や陶器といった遺物に比べ、全国的にも格段に研究史が浅いため、用語を整理し、その分類した基準を明記しなければと考える。そこで、本遺跡の整理作業を進める中で行ってきた基準について触れておきたい。

金山研究の先進地である山梨県の出土例や、今村啓爾の分類（今村1990）を参考にすると、石製の鉱石粉砕具として、主に「挽き臼」「磨り臼」「磨り石」「搗き臼」「凹み石」がある。送り仮名を略さないのが主流であり、磨り石、凹み石などは縄文時代のものと区別できるため、これらの用語を用いる事とする。「挽き臼」は、円板状もしくは円筒状を呈し、円形状の磨り面を有するものとしておきたい。「磨り臼」は平坦もしくは凹状の窪みをなす磨り面が１面以上あるもの。「磨り石」は平坦もしくは外側に湾曲する磨り面が１面以上あるもの。「凹み石」は磨り面とは異なる凹部や窪みが一つ以上あるものとした。凹み石の中には、「搗き臼」などが含まれる可能性もあるが、凹みの存在を重視し、凹み石として分類した。また、本遺跡の挽き臼、磨り臼、磨り石、凹み石は大きさや、形状によって細分類が可能である。なお、詳細については、「第３章　考察　第１節　本遺跡の鉱石粉砕具について」を参照していただきたい。

３　基本層序と微地形

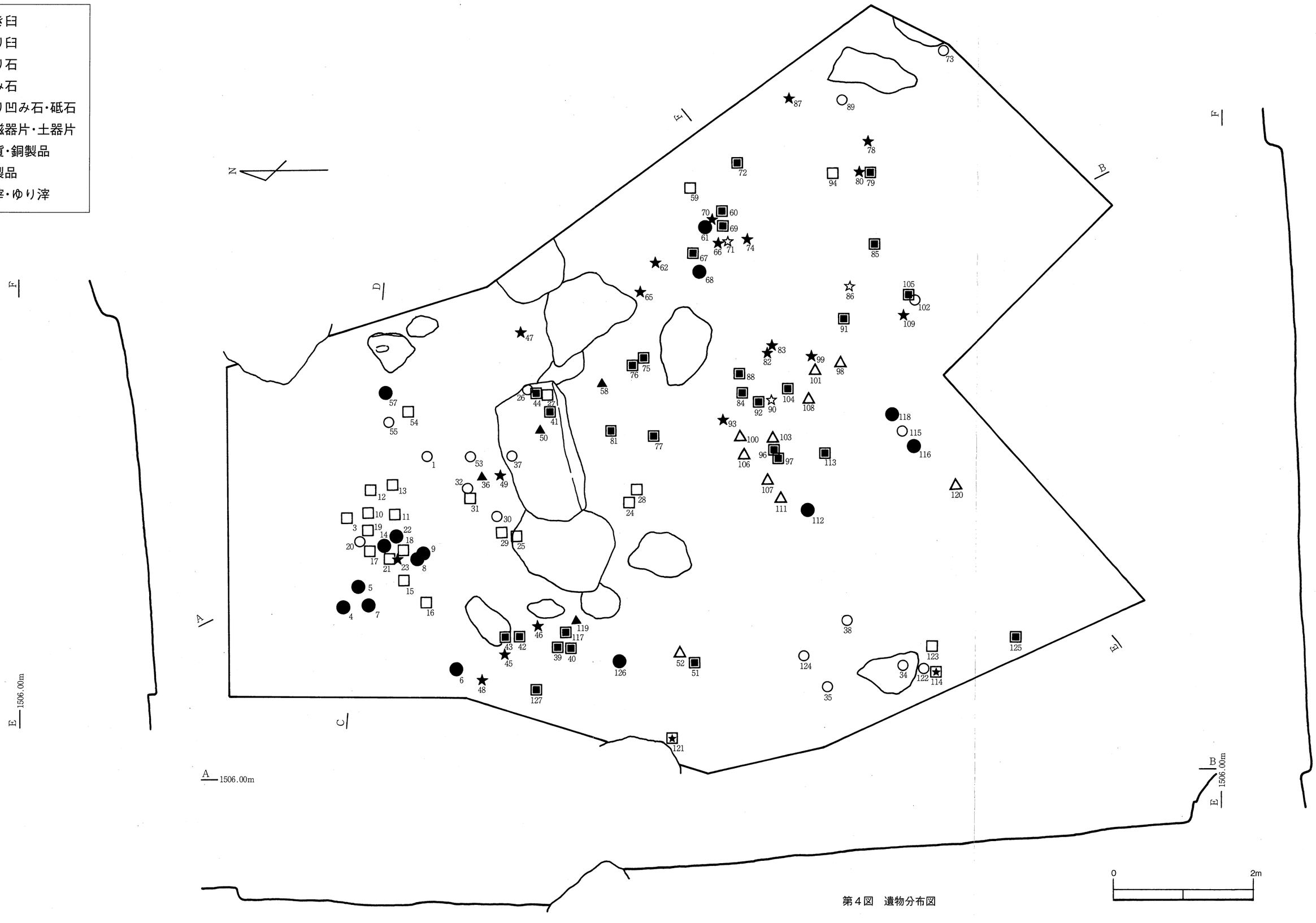
層位は３層に分層することができた。Ⅰ層は黒色土で落葉などが堆積した腐植土で10cmから20cmを測る。Ⅱ層は黄褐色土とⅠ層とが混在する漸移層的要素が強く、５cmから10cm程度である。Ⅲ層は黄褐色土でシルトと岩石が混在している。今回検出された遺物はⅠ層下部及びⅡ層上面から出土している。

本遺跡は、千曲川の支流である梓川の中流部で、現梓川からの距離は16mで、河川との比高差は約５ｍある。調査地点の東及び南は段丘状の登り斜面となり、東側は進入路的な小道となっている。北側もなだらかな登り斜面を形成しており、南北28m・東西10mの小さく一つに区切られたテラス状の地形を形成している。この区切られた中の平坦部分は全体的に川側に向かってなだらかに傾斜し（第３図)、南側と北



第３図　調査範囲と地形

：挽き臼
：磨り臼
：磨り石
：凹み石
：磨り凹み石・砥石
：陶磁器片・土器片
：銭貨・銅製品
：鉄製品
：鉱滓・ゆり滓



第４図　遺物分布図

側でレベル差がある。南側の平坦部分が北側に比べ高くなっており、平坦部分の面積も大きく、北側はそれほどでもない。

第２節　遺物分布と出土遺物

１　遺物の分布

今回の調査では遺構が検出されず、構造物などの有無について知りうる手掛かりが得られなかった。しかしながら、出土遺物の分布（第４図）にある程度の傾向がうかがえる。大まかな傾向は、調査範囲の北側において、鉱石粉砕具が集中的に出土し、南側に散布する状況であった。このような鉱石粉砕具の分布に相反するように、陶器・土器・煙管・銭貨などが南側に片寄り、北側の一部で鉱石粉砕具集中地点の西側にまとまりがある。

また、鉱石粉砕具を詳細にみると、凹み石と磨り石が中央部にまとまり、磨り臼とは異なる分布状況を示し、磨り臼と磨り石が必ずしも同様な分布を示さない。そして、破損した磨り臼が北側の集中地点からほとんど出土し、使用状況が著しくないと思われる磨り臼は南側に２点が、鉱石粉砕具の集中する地点の東側に調査のきっかけとなった磨り臼２点が分布する。また、水晶片や柘榴石などが北側に多くみられ、鉱滓やゆり滓が南側に多くみられた。先にも述べたが、微地形は北側と南側でレベル差があり、北側と南側の分布傾向とほぼ一致する。

これらを積極的に理解するならば、場による作業形態の差が現れていると想定でき、南側は日用品的な陶器や煙管、銭貨が分布しており何らかの施設があったといえ、北側で凹み石による粉砕と不用品の破棄がなされ、南側で磨り臼による粉砕とゆり分け、精錬が行われたとの想定もできる。

２　鉱石粉砕具

本遺跡から出土した主な鉱石粉砕具は磨り臼、磨り石、凹み石であり、挽き臼は２点のみで、凹み石の数量が25点と最も多い。また、磨り面と凹み面が明確に分かれて存在し、前述の基準に合わないものがあるため、その他の鉱石粉砕具として扱った。

１）挽き臼（第５図１・２）

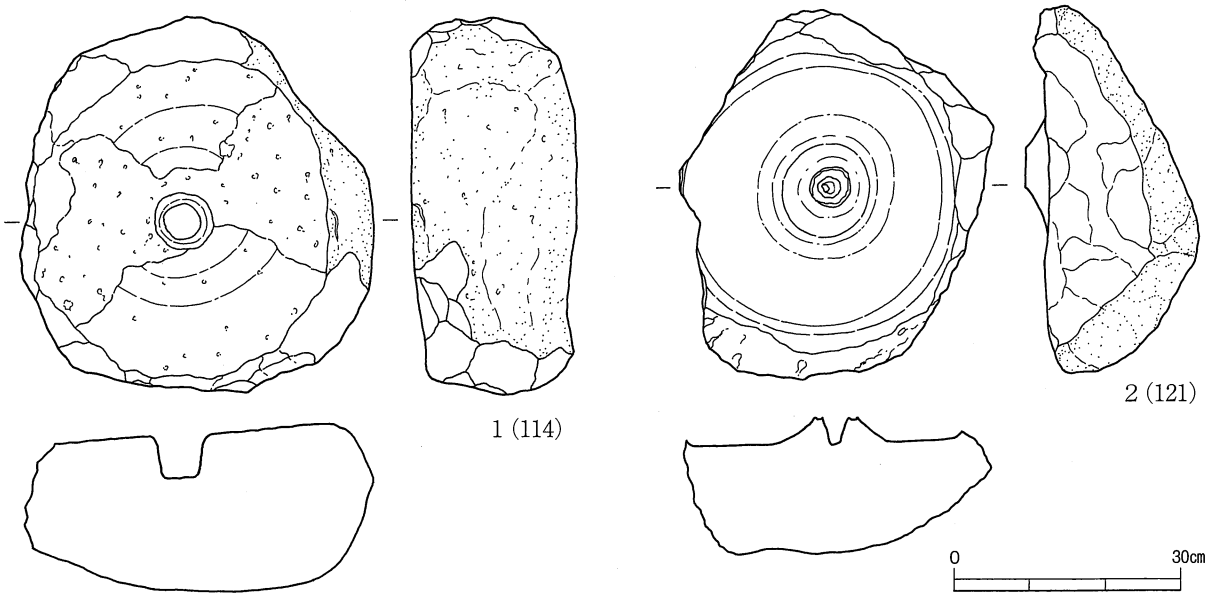
挽き臼は２点出土した。ともに下臼であるが、その形状は全く異なるものであった。

１は挽き臼の下臼である。磨り面の半分以上に敲打痕が観察され、摩滅がある部分においても、敲打痕の深い部分が残る状態であり、磨る作業が進行していない。磨り面の直径は38.0cmあり、その周辺の側面部に剥離がみられ、成形した可能性もあろう。それ以外の裏面は自然面である。軸穴分の直径は7.2cmで深さが5.9cmあり、その内壁中央部がやや摩滅している。使用が初期段階の挽き臼で明確ではないものの軸穴の大きさなどからリンズを用いた挽き臼と思われる。

２は挽き臼の下臼である。厚みが不均衡で磨り面を水平に保つ為には、地中に埋めるなどの何らかの措置が必要となるものである。磨り面の直径は、39.1cmあり、中心部で同心円状の擦痕が観察できる。磨り面の外周は部分的ではあるが、高く磨り残った部分がみられ、側面は剥離、若しくは風化が著しく不整形で、その他の裏面は自然面である。また、軸山の形成が著しく、磨り面から2.6cm高くなっている。軸穴部は直径3.1cmの不整形な円状で、底部は四角形状を呈して不整形ながらも磨耗している。軸山の頂上部分は平坦部が環状に残り、良く観察すると外周部分が突起している。

第２表　出土挽き臼（下臼）観察表

番号	取上番号	形　式	長	幅	厚	軸孔直径	軸孔深さ	側面整形	裏面整形	備　考	図番号	写真図版番号
1	114	リンズ型	50.5	46.0	21.5	7.2	5.9	粗	粗		第５図１	PL3-1
2	121	—	49.5	39.0	23.0	3.1	3.4	粗	粗	軸山著しい	第５図２	PL3-2



第５図　挽き臼実測図

２）磨り臼（第６図１～10）

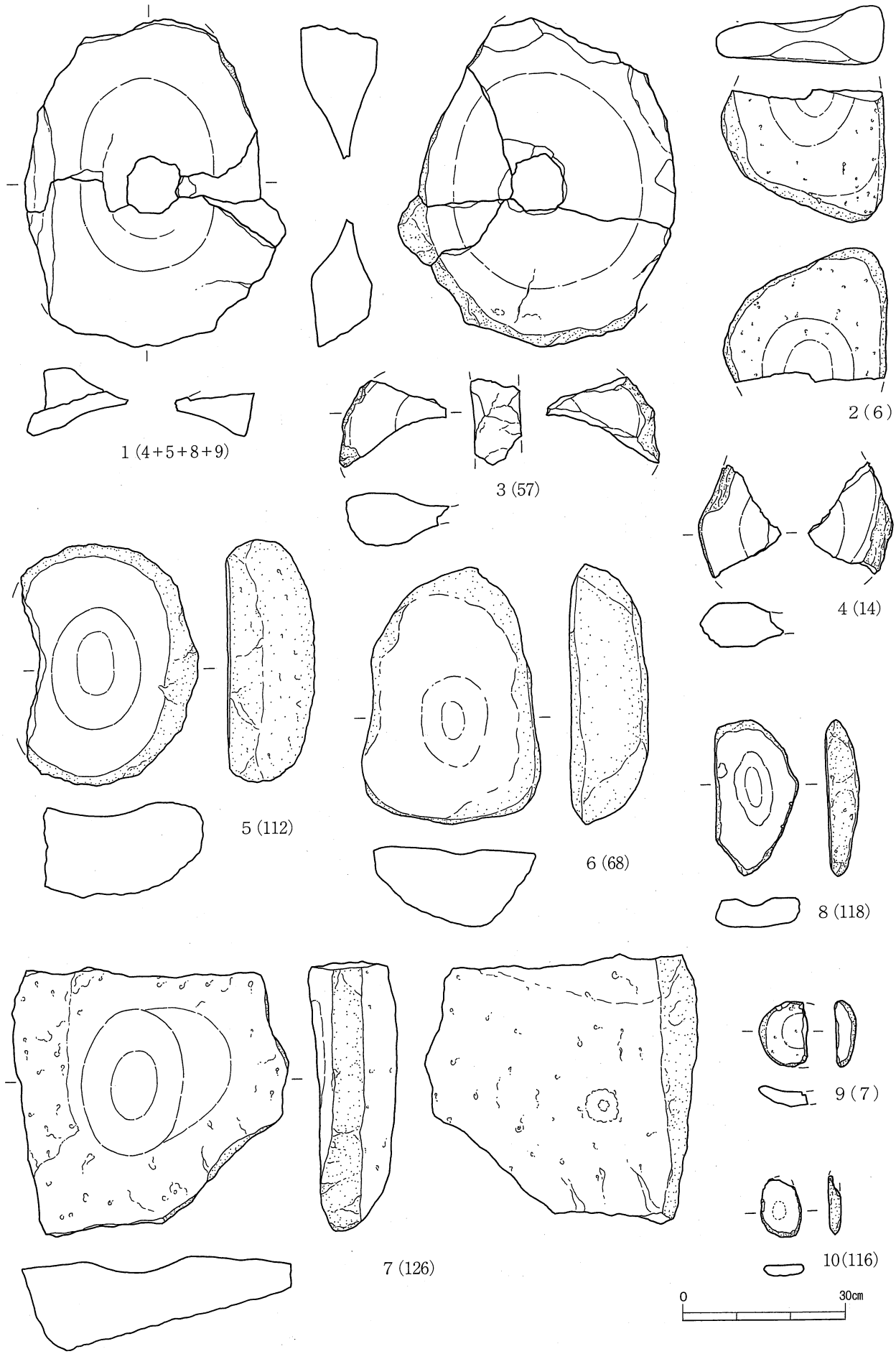
磨り臼は、破片を含めて15点の出土があったが、接合するものや同一個体と考えられるものがあり、個体数は10点である。その内、５点が大きく破損しており、顕著に磨る作業が行われたため磨耗し、破損したものと考えられ、４点が表裏両面を使用している。いずれも側辺の形を整えるような加工はされておらず、自然の形状をそのまま利用している。大きさは大形、中形、小形のものがある。以下、個々に説明したい。

１は今回の調査で出土した中で最大のもので、表裏２面に磨り面がある。４点が接合し、ほぼ原形に近い状況であるが、磨り面である凹面部の中央部及び上部から側辺部を欠損する。表裏ともほぼ全面が磨り面で平坦化しており、その中央部が凹面を形成している。表面の平坦面の部分において多方向の磨り方向が観察される。また、凹面部の形状は表面で楕円形状なのに対し、裏面は円形に近い形状をしている。中央部の欠損は、実測図裏面のみに破損で生じたと思われる剥離痕がみられ、最終的に使用していた面は表面と考えられ、中央部に集中して磨られた結果により破損したものと思われる。残存する側辺部が自然面であることから、側辺部の加工はなかったものと考えられる。

２は２分の１程度欠損するが、大形の磨り臼である。表裏に磨り面があり、２面の使用である。表裏ともに磨る作業を行った平坦面が形成されており、その面積がやや大きめに残っている。表裏の凹面部の深さは、３cm程度で、全体的な大きさに比べ浅いものであるが、楕円形を呈するものと予想される。

３は破損が著しく残存率が良くないものの中形の磨り臼と考えられる。表裏両面に磨り面が存在する。両面とも凹面部の周縁部にも磨り作業が行われた平坦面を形成している。他に同一個体と考えられるもの１点（出土番号61）がある。

４は破損が著しく残存率が良くないものの中形の磨り臼と考えられる。表裏両面に磨り面が存在する。両面とも周辺部に平坦面があり、磨る作業が行われ滑らかな面を形成している。磨り方向は滑らかで観察



第6図　磨り臼実測図

が困難であった。他に同一の個体と考えられるもの１点（出土番号22）がある。

５は一部を欠損し、磨り面は一面で、それほど磨る作業が進行していない。そのため、厚みも十分あり、磨り面側の周縁部まで平滑な磨り面は観察されない。また、断面形態は、かまぼこ状で、平らな場所で必ずしも安定しない。

６は一部を欠損するものの、大形で厚みのある磨り臼で、磨り面は１面である。凹面部は、縦15.0cm、横13.5cmの楕円形で深さ1.0cmの凹みを形成し、浅いものである。また、凹面部の周辺部は平坦であるが微妙な凹凸があり、ほぼ自然面と考えられる。断面形態は逆三角形で、裏面は平でなく、自然面のままである。自然面を多く残し、磨る作業が進行していない磨り臼といえる。

７は大形で板状の磨り臼である。実測図表面の周縁部及び側辺に敲打痕がみられるが、実測図右側が厚いため安定感がない。磨る作業はさほど進行しておらず、表面全てが磨り面を形成していない。凹面部の深さも2.2cmである。また、裏面には敲打痕とともに凹部があり、凹み石としての利用があったものと思われる。

８は小形の磨り臼で、細長い板状を呈する。磨り面は１面で、それ以外はすべて自然面である。中央部やや上部に楕円形の凹面部が形成されており、磨る作業が集中した部分と思われる。また、凹み部分から縁辺にかけては平坦であり、磨り面となっている。その磨り面の一部に剥離面が観察されるが、磨る以前若しくは磨る作業途中の剥離である。

９は小形の磨り臼である。片面のみの使用で、磨り面は１面である。３分の１程度を欠損し、現状では、磨り面を上にした場合、安定感に欠ける。磨り面は、縁辺部に平坦面は形成されておらず、深さ0.7cm程の浅い凹面状を呈している。また、磨り面は滑らかで磨り方向の観察は困難である。

10は板状で小形の磨り臼である。磨り面は１面で、その裏面の一部を欠損する以外は自然面である。磨り面はほぼ平らで著しい凹面を形成していないが、周辺部に比べて中央部が滑らかで、僅かに凹面状を呈している。本資料は本遺跡においては特異的な磨り臼である。

出土資料とは異なるが、調査のきっかけとなった磨り臼についてここで触れておきたい。この資料は、大形で重量があり移動が困難であった。大形であるがそれほど厚みがあるものではなく、板状を呈する。両面の２面で使用が認められ、顕著ではないが凹面がみられ、平坦な部分の面積の方が大きい。平坦部も磨り面と思われる。磨り面は滑らかで、磨り方向は観察できない。

第３表　出土磨り臼観察表

番号	取上番号	分類	長	幅	厚	使用面数	凹み直径	凹み深さ	側面整形	裏面整形	備考	図番号	写真図版番号
1	4	A	61.4	50.5	13.8	2	34.0-26.0 39.0-36.5	4.5 3.8	なし	—	４点接合	第６図１	PL3-3
2	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	４に接合		
3	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	４に接合		
4	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	４に接合		
5	6	A	(24.0)	30.9	(10.4)	2	—	3.0/2.9	なし	—		第６図２	
6	14	A	(20.7)	(15.4)	(9.0)	2	—	—	なし	—		第６図４	
7	22	—	(15.7)	(11.2)	(4.5)	—	—	—	—	—	14と同一個体		
8	57	A	(20.5)	(10.8)	(8.9)	2	—	—	風化	—		第６図３	
9	61	—	(7.2)	(7.0)	(4.7)	—	—	—	—	—	57と同一個体		
10	68	B	(48.3)	32.2	15.4	1	15.0-13.5	1.0	なし	なし		第６図６	PL3-5
11	112	B	45.5	(33.0)	16.5	1	22.0-14.5	4.1	なし	なし		第６図５	PL3-4
12	126	B	51.6	49.5	18.3	2	23.5-15.0	2.2	なし	なし	裏面に敲打痕	第６図７	PL3-6
13	7	C	12.2	(8.9)	(3.3)	1	—	(0.7)	なし	なし	残1/2	第６図９	PL3-8
14	116	C	(11.0)	(7.0)	3.2	1	全体的	0.2	なし	なし		第６図10	PL3-9
15	118	C	29.0	10.6	5.9	1	13.1-6.0	1.6	なし	なし		第６図８	PL3-7

3）磨り石（第７図１～17）

磨り石は17点出土した。全体的に様々な形状を成すが、小形のものと中形のものとに分類できる。また、磨り面は凸面状を呈するものが多いが、平坦に近い状況のものもみられる。

１は中形の磨り石である。花崗岩を石材としている。裏面は自然面で、磨り面は一面であるが実測図右側辺部において磨り面の角度が変わっている。磨り面は凸状にやや湾曲する。磨り方向はともに厚みの薄くなる方向へ向っているようだが、角度の変化があることを考えると一定方向へ磨っているとは考えにくい。

２は中形で厚みのある磨り石で、表裏２面で磨り面が観察できる。磨る作業が著しく行われていないようで、磨り面がよく磨耗せず他に比べ滑らかではない。また、実側図表面でやや凸状に湾曲するものの、裏面は平坦である。表面は磨り方向が一定方向と思われる。欠損しているが、表面の磨り面が破損部に入り込むかたちで観察でき、欠損後も磨る作業を継続したようである。裏面の磨り面は、磨る作業がさらに進行しておらず、細かい凹凸が観察でき、凹み石でみられる平坦面的なあり方である。

３は本遺跡の磨り石の中では大形の磨り石で、表裏２面で磨り面が観察され、断面形態は楔形を呈する。実測図表面はほぼ縦に磨り方向が観察でき、一定方向と思われる。左側辺部に欠損部があるものの新しい剥離ではない。また、側辺でやや角度の変わる磨り面がある。裏面は、実測図右側辺で、横方向の磨り方向が観察でき、一定方向の磨り面である。表裏とも磨り面は僅かながら凸状に湾曲する。

４は中形の磨り石である。磨り面は１面でそれ以外は自然面で、断面形態は楔形を呈する。磨り面はわずかながら凸状に湾曲するものの、微細な凹みがあり滑らかではない。また、左側辺部で角度の変化する磨り面が２面あり、磨り方向の一定性は感じられない。

５は中形の磨り石で、磨り面は１面で、他は自然面である。実測図左側辺で僅かな面積であるが角度の異なる磨り面がある。磨り面は極僅かであるが凸状に湾曲する。磨り方向は、実側図横方向に観察できる。断面形態は楔形を呈する。

６は中形の磨り石で、磨り面は１面である。全体的に厚みがあり、細長い形状を呈する。磨り面はかなり微細な凹凸が観察でき、磨り方向は斜め方向と一部それと交わる方向で観察される。極僅かであるが凸状に湾曲する。また、全側辺部に磨り面からの方向による剥離が観察され、他の磨り石にはみられない。磨り面と側縁部の剥離の新旧関係は、それぞれ異なり、磨る過程の中で剥離したものと考えられる。

７は中形の磨り石で、磨り面は１面である。磨り面は微小な凹凸がみられ、湾曲は緩やかで平坦である。長軸の上下ともに剥離面が観察されるが、加工の意図が感じられないものである。裏面は自然面であるが、右側面の上部に若干の敲打痕がみられる。

８は、欠損しており中形の磨り石と考えられる。磨り面は一面でその他は自然面で、断面形態は長方形状を呈する。磨り面は微小な凹凸があり滑らかではなく、ほぼ平坦面となっている。また、磨り面の一部が剥離している。磨り方向は、観察が困難であった。

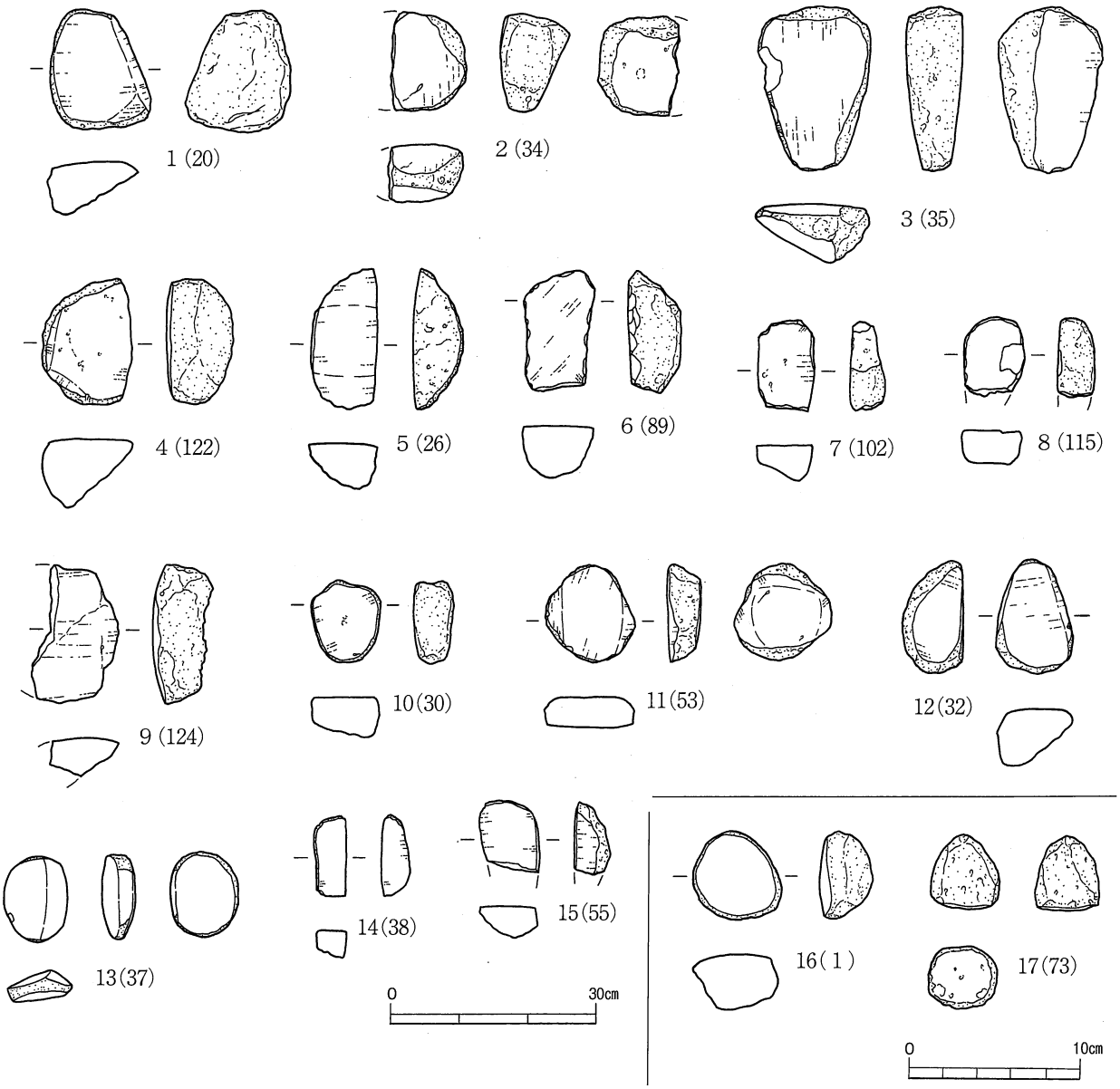
９は破損が著しいが、中形の磨り石である。磨り面は滑らかで、凸状が著しい。磨り方向は横方向に一定方向で観察できる。また、欠損部を中心に付着物が多くみられ変色している。

10は小形で拳大の磨り石である。磨り面は一面で滑らかであり、他は自然面で構成されている。自然面の一部は、熱を受けたように黒く変色している。磨り方向は一定方向で斜めに観察される。磨り面はほぼ平坦で中央部に微細な凹みが残る。

11は小形で拳大の磨り石で、磨り面が表裏２面ある。実測図表面の磨り面は左側辺部と右側辺部で角度が異なる磨り面が形成されているが、主な磨り面はほぼ平坦である。また、裏面ほどは滑らかな磨り面で

第４表　出土磨り石観察表

番号	取上番号	分類	長	幅	厚	使用面数	磨り方向	備　　考	図番号	写真図版番号
1	20	A	19.5	14.4	7.5	1	多		第７図１	PL4-1
2	34	A	(11.2)	(14.6)	(10.3)	2	一方向		第７図２	
3	35	A	24.4	(16.7)	8.1	2	一方向		第７図３	PL4-2
4	122	A	18.4	13.7	9.9	1	多		第７図４	
5	26	B	21.0	10.1	7.5	1	一方向		第７図５	PL4-3
6	89	B	17.9	10.4	8.1	1	多		第７図６	PL4-4
7	102	B	13.4	8.4	5.9	1	多		第７図７	
8	115	B	(11.6)	8.9	5.6	1	不明		第７図８	
9	124	B	(20.5)	(11.8)	(8.0)	1	一方向	変色、付着物あり	第７図９	PL4-5
10	30	C	12.2	10.0	5.6	1	一方向		第７図10	
11	53	C	14.6	12.9	5.1	2	多		第７図11	PL4-6
12	32	D	16.5	12.2	8.0	2	一方向		第７図12	PL4-7
13	37	D	12.5	10.0	4.8	4	不明		第７図13	PL4-8
14	38	D	11.9	4.8	4.1	2	一方向		第７図14	PL4-9
15	55	D	(10.8)	(8.0)	(5.7)	2	一方向		第７図15	
16	1	E	5.5	5.0	3.4	1	不明		第７図16	PL4-10
17	73	E	4.5	4.4	4.0	1	不明		第７図17	PL4-11



第７図　磨り石実測図

はなく、磨り方向は一定方向によるものではないものと考えられる。裏面は、よく磨りこまれた滑らかな磨り面で、凸状にやや湾曲する。

12は大きめな拳大の磨り石で滑らかな磨り面で構成されている。磨り面は、表面とそれに接する側面の２面あり、磨り面は凸状にやや湾曲する。実測図表面の磨り面は横方向に一定して観察できる。また、右側辺部で角度が変わる磨り面があるものの、微細な凹凸があり、滑らかではない。側辺の磨り面の磨り方向は一定方向によるものと思われる。

13は小形の磨り石で、拳大の大きさである。石質の関係もあると思われるが、よく磨きこまれた磨り面で構成されている。磨り面は４面あり、実測図表面に２面、側面に１面、裏面に１面で、全ての面がやや凸状に湾曲する。磨り方向の観察は困難であるが、同一方向へ磨ったものではないと思われる。

14は小形で棒状の磨り石である。磨り面は２面で、表面の磨り面と直角を成すかのように側辺に磨り面がある。２面ともによく磨られており、滑らかで磨り方向は横方向と思われる。磨り面は凸状にわずかながら湾曲する。

15は、半分以上が欠損しているものの細長い磨り石で、表面と側面の２面に磨り面がある。全て、滑らかな磨り面で、凸状にやや湾曲する。２面とも横方向に磨り方向がよく観察できる。

16は小形の磨り石で、一面のみに磨り面が観察される。磨り面は凸状に湾曲し滑らかで、磨り方向の観察は困難である。断面形態は三角形状を呈す。磨り臼（第６図８～10）との関連がうかがえようか。

17は小形の磨り石で、三角錐状の形態を呈する。石材によるものと思われるが、細かい凹凸があり滑らかな磨り面を形成していないものの、凸状に湾曲している。

４）凹み石（第８図１～13・第９図14～25）

凹み石は25点出土したが、基準が凹みを重視したため数量的に多くなった可能性もある。鉱石粉砕具としては、大形のものと中形のものがみられ、磨り臼ほど小形のものはみられない。全体的に自然石をそのまま用いており、大きく形を変えるような成形加工は施されていない。しかし、凹部を中心に不自然で人工的な平坦面が有るものが多く、使用結果によるものか、最初から必要とする加工であったのか判断が困難であった。また、全体的な形状や凹部の大きさや深さが様々で、使用について同一視できないものと思われる。以下、個々に説明していきたい。

１は中形の凹み石で、凹部が表裏２面に存在する。実測図表面は、平坦部がありその中央部に凹部を形成している。凹部は直径7.0cmと比較的大きく、深さは1.5cmと比較的深い。裏面においても平坦面があり、その中央部に凹部が形成されているが、表面ほど顕著ではない。

２はやや大形で断面形態が扁平形の凹み石である。凹部は表裏２面に存在する。実測図表面は、平坦で凹部とその周辺部は凹凸が著しく、その中央部に凹部が形成されている。凹部の深さは、1.5cmあり深い。裏面も平坦な部分があり、凹部とその周辺に小さな凹凸が観察される。凹部は表面に比べて顕著ではなく、深さも0.9cmと浅い。また、形を整えるような加工は施されていない。

３は今回出土した凹み石の中で最大のもので、断面形態は扁平状の凹み石である。凹部は表裏２面に存在する。実側図表面の凹部は4.0cmとある程度の深さがあり、凹部の周辺部の一部に微細な凹凸が観察できる。裏面の凹部はやや変形した深さ1.0cm程度の浅い凹部である。表裏とも平坦であるが自然面であり、成形するような加工はみられない。

４は中形の凹み石で、凹部が表裏２面に存在する。実測図表面の凹部は、直径約6.0cmと大きく深さは0.9cmを測る。凹部周辺も小さな凹凸があり、平坦化している。裏面は、平坦な部分がほとんどなく、全体的

に凹部を形成している。また、全体的に成形するような加工は見られない。

５はやや大形の凹み石である。実測図表面にのみ凹部があり、裏面は使用されていない。表面を上にした場合やや安定感が悪い。凹部は変形した円形状で、深さは0.9cmを測る。また、凹部を中心に小さな凹凸があり、平坦化している。

６は中形で断面が方形状の凹み石である。凹部は実測図表面と側面の２面にあり、表面、側面の２面とも凹部はともに0.9cmほどの深さで、その形状はやや変形した円形状を呈する。また、凹部を中心に小さな凹凸が観察され、全体的に平坦化している。また、全体の形を整えるような加工はみられない。

７は中形で断面方形状の凹み石である。凹部は実測図表面、側面、裏面の３面に存在する。表面の凹部はやや楕円形を成し、1.0cmの深さがある。凹部周辺は凹凸が著しいものの平坦である。側面の凹部はやや大きめではあるが、0.9cmの深さを測る。やはり、凹部周辺に小さな凹凸があり、平坦化している。裏面の凹部は明瞭ではなく浅いものである。

８は中形で断面が方形状の凹み石である。凹部は実測図表面、側面、裏面の３面にあり、凹部の深さは１cm程度である。３面の凹部の周辺のみに小さな凹凸があるが、顕著な平坦はみられない。また、形状を整えるような加工は施されていない。

９は中形で断面が方形状の凹み石である。凹部は２面に存在する。実測図表面の凹部は、深さ1.0cmを測り、その周辺に微細な凹凸が観察され、平坦化している。裏面の凹部は、顕著ではないが僅かに凹み、周辺部に小さな凹凸があり、小さい面積ではあるが平坦化している。形状を整えるような加工はみられないが、表面の右部分を大きく欠損している。

10は中形で厚みがあり、断面及び平面形態が方形状の凹み石で、凹部が１面にある。実測図表面左側辺の一部が僅かに欠損する。凹部周辺は、微細な凹凸がみられるものの平坦であり、凹部は明瞭ではなく0.4cmの深さを測る。

11は中形で円盤状の凹み石で、凹部が表裏２面に存在する。両面とも微細な凹凸があるものの平坦化している。それぞれ、その平坦面の中央部付近に凹部が形成され、実測図表面の凹部の深さは0.6cmを測り、裏面の凹部は0.8cmで、凹部がそれほど明瞭ではない。

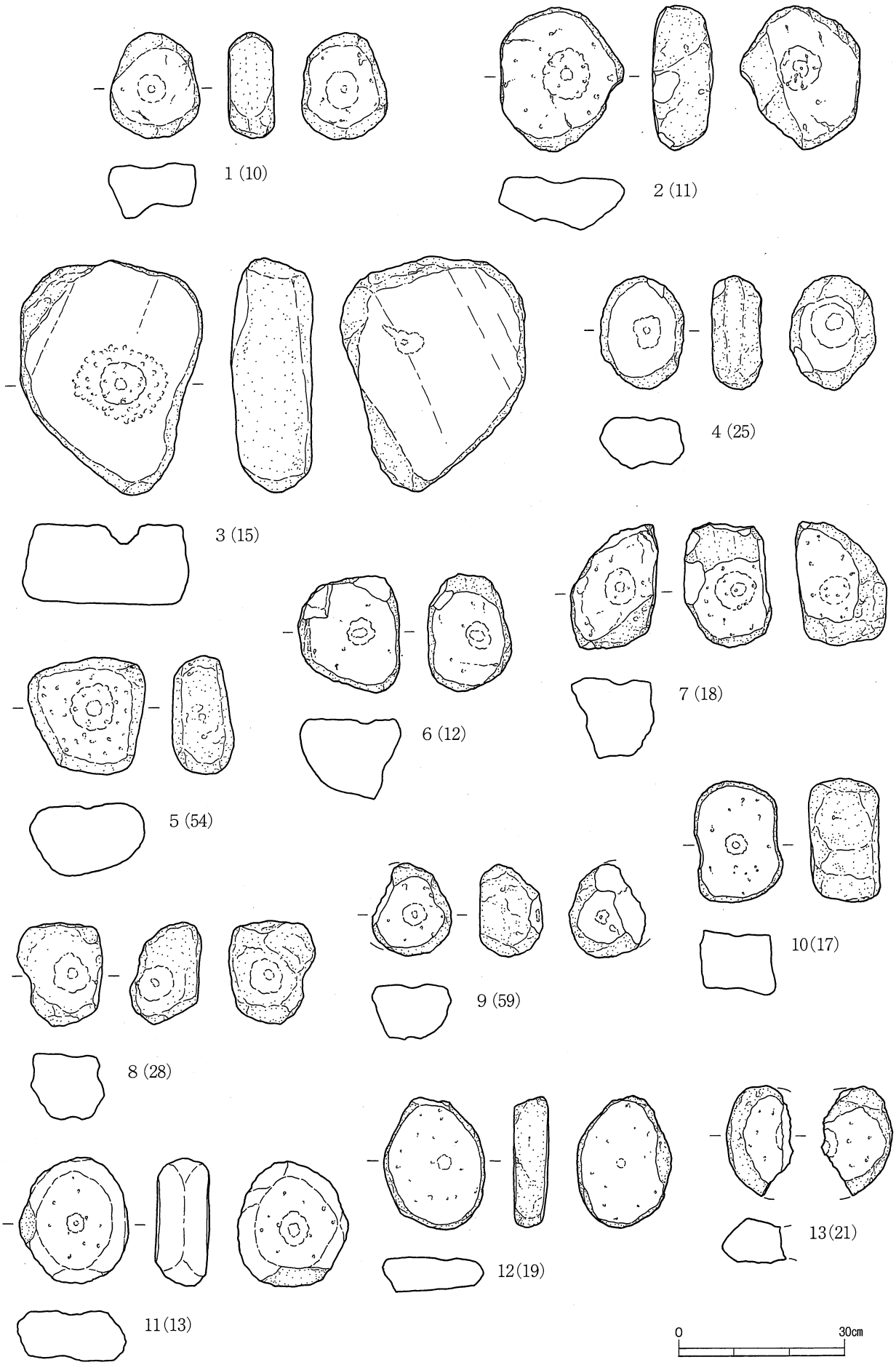
12は中形で円盤状の凹み石で、表裏２面に凹部がある。実測図表面の凹部は直径3.5cmであるが明瞭ではなく深さも0.3cmと浅い。また、凹部が中心より右へずれている。裏面の凹部は更に明瞭ではなく深さも0.2cmしかない。表裏とも微細な凹凸のある平坦面である。

13は約半分が欠損するが円盤状の凹み石で、表裏２面で凹部が存在する。破損が著しく凹部が僅かに残り、凹部周辺は平坦であるが、微細な凹凸が観察される。しかし、実測図表面では凹凸が顕著ではなく、磨り石的な要素も考えられるが、磨り石の磨り面とは異なる。

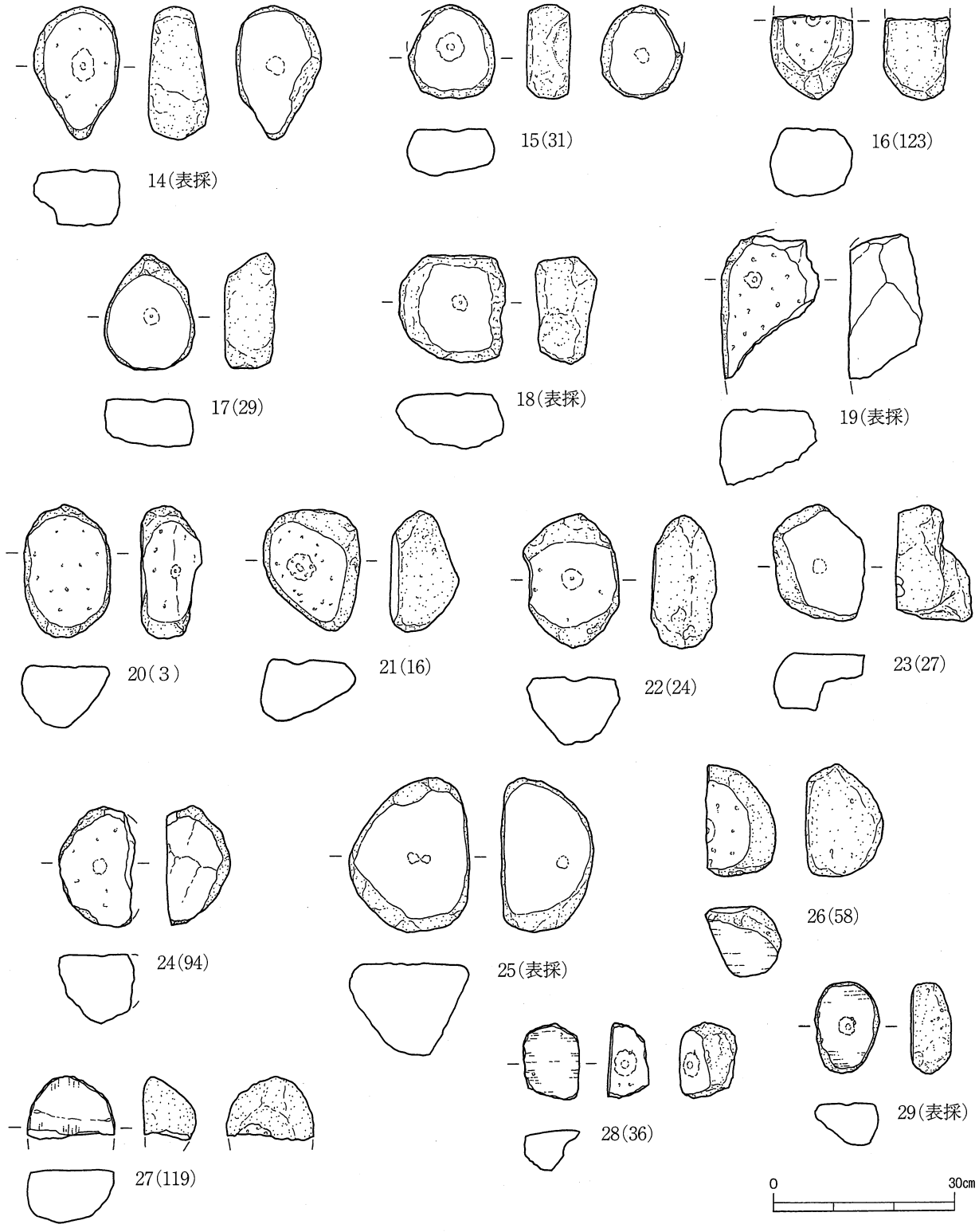
14は中形の凹み石で、凹部が表裏２面にある。両面とも凹部周辺に微細な凹凸があり、平坦化している。特に実測図裏面の凹部は明瞭でなく、深さもない。表面の凹部は直径が6.4cmほどで、深さも0.8cmある。出土地点記録前に取り上げてしまったため、採集資料として扱った。

15は今回出土した凹み石の中では小さいものの円盤状の凹み石で、実測図表面の左側辺の一部を欠損する。凹部が表裏２面に存在する。実測図表面の凹部は直径が4.7cmあり深さは0.7cmあり、その周辺は平坦化しており、微細な凹凸が観察される。裏面の凹部は明瞭ではなく0.2cmと極浅いものであり、表面ほど平坦面の凹凸が顕著ではなく、磨り石的な要素も考えられる。

16は厚みのある中形の凹み石で、半分以上を欠損する。凹部は１面にあり浅いもので、欠損しているものの円状を呈する。凹部の周辺は微細な凹凸があるものの平坦面を形成している。これら以外はすべて自



第８図　凹み石実測図



第９図　凹み石・その他鉱石粉砕具実測図

第５表　出土凹み石観察表

番号	取上番号	分類	長	幅	厚	使用面	凹み直径	凹み深さ	側面整形	裏面整形	備　考	図番号	写真図版番号
1	10	A	19.6	16.2	8.9	2	7.0	1.5	無	—	裏面凹僅か	第８図１	PL4-12
2	11	A	26.4	23.0	9.5	2	8.0/7.5	1.5/0.9	無	—		第８図２	
3	15	A	43.4	33.5	14.0	2	11.0/5.2	4.0/1.0	無	無		第８図３	PL4-15
4	25	A	21.0	16.5	10.0	2	6.0/7.0	0.9/1.2	無	—		第８図４	PL4-14
5	54	A	22.0	20.9	13.0	1	5.0	0.9	無	無		第８図５	
6	12	B	21.4	17.5	16.2	2	4.5/5.5	0.9/0.9	無	—		第８図６	PL4-13
7	18	B	23.0	14.7	14.3	3	6.0/5.5/4.4	1.0/1.1/0.5	無	—		第８図７	PL5-1
8	28	B	19.4	15.0	12.2	3	6.4/4.5/6.5	1.1/1.1/1.2	無	—		第８図８	PL5-2
9	59	B	(17.0)	(14.1)	(11.4)	2	5.2/2.7	1.0/0.4	無	—		第８図９	
10	13	C	23.0	20.1	9.2	2	4.4/5.3	0.6/0.8	無	—		第８図11	
11	17	C	22.4	16.4	12.0	1	4.2	0.4	無	無		第８図10	PL5-3
12	19	C	24.5	18.2	6.7	2	3.5/1.8	0.3/0.2	無	—		第８図12	PL5-4
13	21	C	(20.0)	(11.9)	(8.0)	2	—	—	無	—	残1/2	第８図13	
14	29	C	19.5	14.9	8.0	1	4.6	0.6	無	無		第９図17	PL5-6
15	31	C	15.6	14.6	7.1	2	4.7/1.8	0.7/0.2	無	—		第９図15	PL5-5
16	表	C	22.4	14.4	9.6	2	6.4/2.6	0.8/0.3	無	—		第９図14	
17	表	C	18.0	17.8	10.3	1	3.3	0.5	無	無		第９図18	
18	123	C	(14.2)	(15.6)	(13.2)	1	—	—	無	無		第９図16	
19	表	C	(24.0)	(18.7)	(12.1)	1？	3.0	0.6	無	無		第９図19	
20	3	D	22.1	13.4	9.5	1	—	—	無	無	凹わずか	第９図20	
21	16	D	20.4	19.4	13.0	1	4.6	0.8	無	無		第９図21	
22	24	D	22.4	15.6	11.1	1	5.3	0.4	無	無		第９図22	PL5-7
23	27	D	19.5	13.2	14.3	1	3.0	0.3	無	無		第９図23	PL5-8
24	94	D	(20.2)	(12.6)	(11.3)	1	3.2	0.4	無	無		第９図24	
25	表	D	26.0	21.8	15.9	2	2.0/2.2	0.3/0.3	無	—		第９図25	

然面である。

17は中形で円盤状の凹み石で、凹部が１面にある。凹部の形状は明瞭ではなく、深さは0.6cmである。凹部の周辺は微細な凹凸が観察され平坦化しているものの磨り面とは異なる。裏面も平坦であるが、自然面であり、形状を整えるような加工はみられない。

18は中形でやや厚みのある円盤状の凹み石で、凹部が１面にある。凹部が0.5cmと浅く形状が円状に整っていないが、凹部周辺は全体的に平坦で、微細な凹凸が観察される。裏面の自然面には凸部があり、平らな場所では安定しない形状を成している。出土地点記録の前に取り上げてしまったため、採集資料として扱った。

19は破損が著しいが、中形の凹み石で、現状からは凹部が１面にある。凹部周辺は微細な凹凸が観察され平坦化している。凹部はそれほど明瞭でなく中央部からはずれている。

20は中形の凹み石で、断面形態は三角形状を呈する。凹部といえるまでの凹みはなく、実測図表面と右側辺部の中央部が僅かに凹む程度である。いずれも平坦化しており、微細な凹凸が観察できる。その平坦面の状況は他の凹み石と同様であり、磨り石の磨り面とは異なる。また、平坦面を上にした場合安定感がない。

21は中形の凹み石で、断面形態が三角形状を呈する。実測図表面に凹部があり、凹部を中心に平坦化が著しく、微細な凹凸により構成される。凹部は深さ0.8cmを測り、やや変形した円形状を呈する。平坦面を上にした場合安定感に欠け、凹面部以外は自然面である。

22は中形で断面が三角形状に近い凹み石である。凹部はそれほど明瞭ではないが１面で観察でき、深さは0.4cmを測る。凹部の周辺に微細な凹凸があり、平坦化している。また、凹部の右の部分の一部のみに平坦面を形成している。

23は中形の凹み石で、実測図裏面が一部欠損する。実測図表面に凹部あり、凹部は0.3cmと浅く、大きさも直径３cmほどで大きくはない。また、凹部を中心に平坦化が著しく、その縁辺部に小さな剥離が観察され、他の凹み石にみられた平坦面とは異なり、磨り石の磨り面的要素が強いように思われる。さらに、欠損している事によるかもしれないが、凹部を上にした場合安定感が全くない。

24は中形で断面が三角形状に近い凹み石である。欠損しているため凹部は１面で観察されるが、裏面に平坦化した部分があり、本来２面あったのかもしれない。実測図表面の凹部は形状が明瞭でなく、深さも0.4cmと浅いものである。また、凹部を中心に微細な凹凸が観察でき平坦化している。

25はやや大形で断面形態が三角形状に近い凹み石である。凹部は２面に存在する。実測図表面の凹部は浅く、２cm程度の不整形なもので、並んで２箇所ある。その周辺部から縁辺にかけて平坦化しており微細な凹凸がみられる。実測図右側辺にも凹部があり、やや右側に寄った位置に2.0cm程度の不整円状を呈し、0.3cmとかなり浅いものである。その周辺部が平坦化し極微細な凹凸が観察できる。これら２面以外はすべて自然面であり、いずれの凹部を上にした場合も安定感がない。

５）その他の鉱石粉砕具（第９図26～29）

凹面部と磨り面が異なる面で明確に分かれて存在し、凹み石であり磨り石であるもので、２点出土した。凹み石から磨り石への転用若しくは、磨り石から凹み石への転用品と考えられる。また、同一面で明らかな磨り面と凹部が存在するもの１点があり、ここで説明したい。

26は凹部のある面１面と磨り面１面が観察され、凹面部を中心に割れたものと思われる。その割れ面に入り込むように磨り面が形成されており、凹み石から磨り石への転用と思われる。磨り面は凸状に湾曲しているものの、僅かであるが微細な凹凸がみられる。凹面は全体的に平坦であるが、小さい凹凸がある。凹面部の直径は4.5cmあり、深さは0.9cmを測る。

27は、形状などが26に類似しているためここで取り上げた。磨り面が１面あり、その反対側に微細な凹凸のある平坦面が形成されており、欠損部側に凹部があるものと思われる。26と同様に欠損後も磨る作業を継続している。磨り面はわずかに凸状に湾曲し、微細な凹凸があり滑らかではない。凹み石から磨り石へ転用されたと考えられる。

28は小型のもので、磨り面１面と凹部のある面が１面観察される。実側図表面が磨り面で、横方向に磨り方向が観察され、僅かであるが凸状に湾曲する。また、右側辺部で角度が変わる磨り面が線状にあり、凹部のある面を切っているため、凹み石からの転用と考えられる。凹部がやや左側に寄っており、その周辺部に微細な凹凸が観察され、平坦化している。凹面部は直径4.6cmあり深さは0.8cmを測る。また、実測図裏面の右側辺に剥離がある。

29は基準では凹み石に分類できるものであるが、同一面で磨り面と凹部があるため、ここで取り上げた。大きめの拳大で断面形態は三角形状を呈する。磨り面は凸状に湾曲し、横方向の磨り方向が観察できる。

第６表　出土その他鉱石粉砕具観察表

番号	取上番号	名　称	長	幅	厚	使用面	凹み直径	凹み深さ	側面整形	裏面整形	磨り方向	備　考	図番号	写真図版番号
1	36	磨り凹み石	12.6	9.8	7.2	2	4.6	0.8	無	無	一方向	凹み面は磨り平面	第９図28	PL5-10
2	58	磨り凹み石	(19.0)	(11.5)	(12.2)	2	4.5	0.9	無	無	一方向	凹み面は敲打痕のみ	第９図26	
3	119	磨り凹み石	(10.5)	(16.5)	(11.4)	2	—	—	無	無	一方向		第９図27	
4	表	磨り凹み石	15.3	10.8	6.8	1	2.9	0.4	無	無	一方向	磨り面と凹部が同一面にあり	第９図29	PL5-9

その磨り面の中央部に凹みがあり、その周囲のみに微細な凹凸がみられる。磨り面と凹部の前後関係は判断できない。また、熱によると思われる変色が部分的に観察できる。

3　陶磁器・土器

陶磁器と土器はあわせて32点が出土した。そのほとんどが小剥片であり、観察表及び写真図版を中心に市川氏のご教示とともに説明を加えたいと思う。

1）陶磁器（第10図1～4）

碗や皿といった食器類が多く、擂鉢が1点見られる程度である。全体量が少ない点に注意しなければならないが、皿類がそのほとんどを占めている点が特徴的と考えられる。そのほとんどが瀬戸美濃産で、時期的にも16世紀末から17世紀前半におさまるものがほとんどである。そして、小さい剥片のため不確定要素が強いが、16世紀後半と思われる中国産で、軟質の青花碗（ＰＬ６－１）1点と時期不明で中国産か伊万里か不明なもの3点（ＰＬ６－２・３・５）がみられる。

2）土器（第10図5・6）

カワラケがほとんどで、内耳片3点がみられる。内耳片についも小剥片で年代不明であるが、16世紀後半で遡っても15世紀後半と思われる。カワラケも年代を特定できないが、ほぼ類似時期と考えられ、16世紀前半までは口縁端が外反するものが知られ、その形態のものが含まれない点から16世紀後半以後と考えられる。また、注目すべき点は鉱滓が付着したものが2点（ＰＬ６－27・29）あり、カワラケを転用し坩堝として使用したものと思われる。また、2次焼成を受けたカワラケ2点（ＰＬ６－23・25）もみられ、坩堝の可能性が高い。

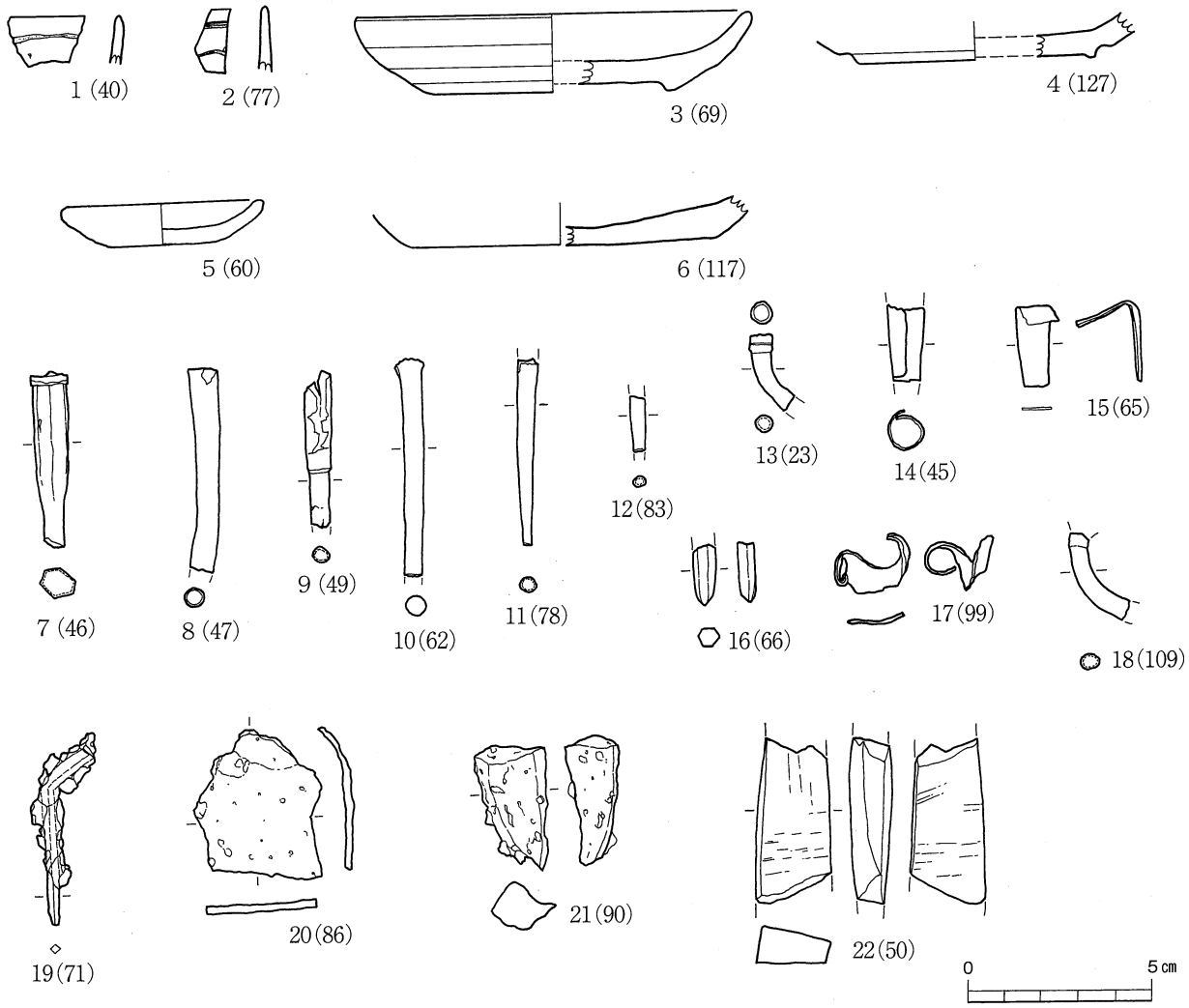
第７表　出土陶磁器・土器類観察表

番号	取上番号	器形	素地	口径	底径	器高	産　地	年　代	備　考	図番号	写真図版番号
1	40	碗	磁器				中国？	16世紀後半？	軟質の青花碗か	第10図1	PL6-1
2	75	—	磁器				—	—	伊万里か中国		PL6-2
3	77	皿	磁器				—	—	伊万里か中国	第10図2	PL6-3
4	84	丸碗	磁器				瀬戸美濃連房	17世紀？	鉄釉の碗か天目の碗か不明		PL6-4
5	96	皿	磁器				—	—	伊万里？		PL6-5
6	105	丸碗？	磁器				瀬戸美濃連房	近世			PL6-6
7	39	丸皿	陶器				瀬戸美濃連房	16世紀末～17世紀初	志野丸皿		PL6-7
8	41	皿	陶器				瀬戸美濃連房？	17世紀？			PL6-8
9	42	丸皿	陶器				瀬戸美濃連房	16世紀末～17世紀初	43と同一・志野丸皿		PL6-9
10	43	丸皿	陶器				瀬戸美濃連房	16世紀末～17世紀初	志野丸皿		PL6-10
11	—	丸皿	陶器				瀬戸美濃連房	16世紀末～17世紀初	43と同一		PL6-11
12	67	擂鉢	陶器				瀬戸美濃連房	17世紀前半？			PL6-12
13	69	皿	陶器	11.0	6.8	2.2	瀬戸美濃大窯	16世紀末	内ハゲ皿・大窯4期	第10図3	PL6-13
14	72	皿	陶器				瀬戸美濃連房	17世紀前半	志野丸皿		PL6-14
15	81	皿	陶器				瀬戸美濃連房	17世紀前半	志野丸皿		PL6-15
16	127	皿	陶器	—	6.6	—	瀬戸美濃連房	17世紀前半？	2次焼成による釉剥落・志野丸皿か	第10図4	PL6-16
17	44	内耳鍋	土器				県内	16世紀？	体部破片		PL6-17
18	51	内耳鍋	土器				県内	16世紀？	口縁端部小片		PL6-18
19	60	内耳鍋	土器				県内	16世紀？	内耳鍋体部片		PL6-19
20	60	皿	土器	5.6	3.0	1.2	県内	—	カワラケ	第10図5	PL6-20
21	76	皿	土器				県内	—	カワラケ		PL6-21
22	79	坏	土器				県内	—	カワラケ		PL6-22
23	85	坏	土器				県内	—	カワラケ・2次焼成		PL6-23
24	88	皿	土器				県内	—	カワラケ		PL6-24

番号	取上番号	器形	素地	口径	底径	器高	産　地	年　代	備　考	図番号	写真図版番号
25	91	坏	土器				県内	—	カワラケ・2次焼成		PL6-25
26	92	皿	土器				県内	—	カワラケ		PL6-26
27	97	坩堝	土器				県内	—	鉄滓付着・カワラケの転用		PL6-27
28	表	皿	土器				県内	—	カワラケ		PL6-28
29	104	坩堝	土器				県内	—	鉄滓破断面付着・カワラケの転用		PL6-29
30	113	皿	土器				県内	—	カワラケ		PL6-30
31	117	—	土器	—	8.4	—	県内	—	カワラケ・底部片	第10図6	PL6-31
32	125	内耳鍋	土器				県内	16世紀？	耳部・穿孔あり		PL6-32

4　銭貨

銭貨は、15点が出土した。その内3点は、欠損し、残存率が良くない。11点は一地点よりまとまって出土しいくつかは互いに付着した状況で出土した。文字の確認できるものは8点で、元祐通寶1点、開元通寶1点、天聖通寶1点、政和通寶3点、永楽通寶1点でこれら7点は、輸入銭である。残りの1点が慶長通寶で、慶長11（1606）年に江戸幕府により鋳造されたとされるものである。



第10図　陶磁器・銭貨・銅製品等実測図

第８表　出土銭貨観察表

番号	取上番号	銭　名	長	幅	厚	穿径	材質	初鋳年代	備　考	図番号	写真図版番号
1	48	■■■寶	(1.1)	(0.9)	(0.1)	—	銅	—	残1/8		
2	70	■■■（寶）	(1.9)	(0.9)	(0.1)	—	銅	—	残1/4 文字不読		
3	80	銭貨片	(1.5)	(1.0)	(0.3)	—	銅	—	残1/8 腐食著しい		
4	82	元祐通寶	2.3	2.3	0.1	0.6	銅	宗元祐８年(1093)	３枚重なり１裏 82-1		PL7-1
5	82	開元通寶	2.5	2.5	0.1	0.6	銅	唐武徳４年(621)	３枚重なり２表 82-2		PL7-2
6	82	■■■■	2.5	2.5	0.1	0.6	銅	—	３枚重なり３裏 鉄分多付着　82-3		PL7-3
7	82	天聖元寶	2.4	2.4	0.1	0.6	銅	宗天聖元年(1023)	８枚つながり１裏 82-4		PL7-4
8	82	■■通寶	2.3	2.3	0.1	0.7	銅	—	８枚つながり２裏 82-5		PL7-5
9	82	政和通寶(折二)	2.5	2.5	0.1	0.6	銅	宗聖和元年(1111)	８枚つながり３裏 82-6		PL7-6
10	82	政和通寶(折二)	2.5	2.5	0.1	0.6	銅	宗聖和元年(1111)	８枚つながり４裏 82-7		PL7-7
11	82	政和通寶	2.4	2.4	0.1	0.5	銅	宗聖和元年(1111)	８枚つながり５裏 82-8		PL7-8
12	82	慶長通寶	2.3	2.3	0.1	0.6	銅	慶長11年(1606)	８枚つながり６裏 82-9		PL7-9
13	82	永楽通寶	2.5	2.5	0.1	0.5	銅	明永楽６年(1408)	８枚つながり７表 82-10		PL7-10
14	82	■■■寶	2.2	2.2	0.1	0.6	銅	—	８枚つながり８裏 82-11		PL7-11
15	93	開■■寶	(2.4)	(1.2)	(0.1)	—	銅	唐武徳４年(621)	残1/2		PL7-12

５　銅製品

銅製品は、14点が出土した。その内６点は煙管であり、すべて吸口部である。すべて緑青に覆われた状態で出土した。以下個々に説明を加えたい。

１）煙管（第10図７～12）

７は煙管の吸口部で変形しており、吸口側が欠損する。連結部分で六角形状を呈し、途中で円形になる。

８は円筒状の煙管の吸口部で、外圧により僅かに曲がっている。連結部から吸口にかけて、徐々に細くなる。

９は破損が著しいが、円筒形の吸口部で、現存する中間付近でくびれて太くなる。

10円筒状の吸口部で、連結部が外圧により潰れている。全体的にほぼ均一な太さであるが、連結部分にかけて若干太くなる。

11は細い円筒状の吸口部で、吸口側の外径は0.2cmとかなり細く連結部にかけて徐々に太くなる。

12は吸口の一部であるが、細い円筒状のもので、両端を欠損する。(11）と同一形態と予想される。

２）その他の銅製品（第10図13～18）

13は筒状の製品で、外径が0.5cmと細く、先端部にかけて緩やかに湾曲する。先端部でくびれて太くなり、太い部分の中央部に一本の溝が刻まれている。形状、材質ともに煙管の雁首部の可能性が考えられるが、明確ではなく銅製品とした。

14は板状のものを丸めて、筒状にしたもので、0.5cm程度の重なり部分が観察される。形状的、材質的に煙管とも考えられるが、他の煙管とは製作方法が異なるため、断定できない。

15は板状のものを曲げたもので、残存率が悪く、いかなるものか断定できない。

16は欠損しており先端部のみで、断面が六角形状で先端部が釘状に尖るものである。

17は本来、V字状の板状を呈するもので、その先端が丸まっている。切断の際に生じた切り屑にも感じられ、製品とは思えないものである。よって用途など理解できなかった。

18は細いパイプ状のものがやや湾曲したもので、両端を欠損し、両端の直径が微妙に異なる。また、細い側の先端部がややくびれる様な感じを受ける。煙管の雁首とも思われるが、明確ではない為、銅製品として扱った。

第９表　出土銅製品観察表

番号	取上番号	名　称	長	幅	厚	備　考	図番号	写真図版番号
1	46	煙管	4.7	1.1	0.8	吸口部	第10図７	PL7-13
2	47	煙管	5.5	0.8	0.8	吸口部	第10図８	PL7-14
3	49	煙管	4.3	0.7	0.6	吸口部	第10図９	PL7-15
4	62	煙管	(5.9)	0.5	0.5	吸口部	第10図10	PL7-16
5	78	煙管	(5.1)	0.6	0.5	吸口部	第10図11	PL7-17
6	83	煙管	(1.5)	(0.4)	(0.4)	吸口部	第10図12	PL7-18
7	23	銅製品	(2.2)	(0.5)	(0.5)	煙管？	第10図13	PL7-19
8	45	銅製品	(2.1)	(1.0)	(0.9)		第10図14	PL7-20
9	65	銅製品	(2.2)	(0.9)	(0.9)		第10図15	PL7-21
10	66	銅製品	(1.6)	(0.6)	(0.5)		第10図16	PL7-22
11	74	銅製品	(1.0)	(0.7)	(0.3)			
12	87	銅製品	(0.8)	(0.7)	(0.1)			
13	99	銅製品	2.3	1.2	0.1		第10図17	PL7-23
14	109	銅製品	(2.7)	(0.5)	(0.5)	煙管？	第10図18	PL7-24

６　鉄製品

鉄製品は、３点出土した。どれも、残存状況が悪く腐食が進行しており、理解に苦しむものばかりであった。（第10図19～21）

19は錆などの腐食物が付着しているが、釘と思われる。断面の形状は四角形で上部の途中から曲がっている。

20は板状のもので、一部が曲がった形態をなす。鉄鍋の可能性も考えられるが小剥片のため特定できない。

21は厚みがあり、楔形の形状を呈するが、細くなる部分において曲がっている。

第10表　出土鉄製品観察表

番号	取上番号	名　称	長	幅	厚	備　考	図番号	写真図版番号
1	71	釘？	(5.2)	(0.3)	(0.3)	付着物多	第10図19	PL7-25
2	86	鉄製品	(4.4)	(3.5)	(0.4)	板状破片	第10図20	PL7-26
3	90	鉄製品	(3.5)	(2.0)	(1.3)		第10図21	PL7-27

７　その他（砥石、鉱滓、ゆりかす）

その他に砥石１点と鉱滓やゆり滓が出土している。また、多量の水晶片や石英片、少量ではあるが柘榴石などが出土している。

出土した砥石（第10図22）は、両端を欠損する。断面形態は長方形に近く、全ての面において作業が行われている。全ての面において、縦方向や横方向の磨り痕が観察できる。現存状況は小形のものであり、

よく使いこまれたと予想される。

・鉱滓、ゆり滓

鉱滓が出土しており、現地において熔解を行う作業が行われていた可能性を示唆する。中には溶けた鉱滓が石質物を巻き込んだもの（ＰＬ５－14）１点があり、石質部は全体的に発泡観があり、坩堝などで熔解されたものと思われる。

ゆりかすの出土もみられる。ゆりかす（ＰＬ５－15・16）は、水などで鉱物を選別する作業において、不必要とされたものが溜まり、腐食して塊になったものとされており、遺跡内でゆり分けを行っていた可能性を示唆する。

第11表　その他出土遺物観察表

番号	取上番号	名　称	長	幅	厚	備　考	図番号	写真図版番号
1	50	砥石	(4.6)	2.1	1.1		第10図22	PL5-11
2	52	鉱滓	7.1	4.7	2.5			
3	98	鉱滓	2.7	2.3	1.5			
4	100	鉱滓	5.3	5.1	2.2			
5	101	鉱滓	2.6	2.1	2.1	石質部を鉱滓が巻き込んだ状態		PL5-14
6	103	鉱滓	8.4	5.1	5.2			
7	108	鉱滓	9.2	7.4	6.0			PL5-12
8	120	鉱滓	5.0	3.5	3.4	黒色		PL5-13
9	106	ゆり滓	5.2	4.4	3.0			PL5-16
10	107	ゆり滓	5.5	4.7	3.9	石質部と結合		
11	111	ゆり滓	5.7	3.6	3.1	石英、水晶質のものと結合		
12	表	ゆり滓	8.6	6.2	3.7			PL5-15

第3章　考　　察

第1節　本遺跡の鉱石粉砕具について

1　鉱石粉砕具について

本遺跡から石製の鉱石粉砕具が多く出土し、これらを検討していく中で、用語や分類に若干の疑問点が生じたので、整理しておきたい。

鉱山に関連する遺跡に特徴的に存在する遺物は、鉱石をより細かくするために必要な石製の粉砕道具であり、考古学的な目からそれらが研究され始めたのは、1986年に開始された山梨県黒川金山遺跡の調査であろう。それまでは、特徴がはっきりしている磨り臼や挽き臼の存在が把握されただけで、文献的研究の裏づけ的な要素が強かったのではないだろうか。

石製の粉砕道具類の用語に関する整理と分布による考察を先ず試みたのは、今村啓爾である（今村1990）。この中で、今村は粗割り段階と粉砕段階で分け、「凹み石・扣き石」を粗割り段階とし、粉砕段階として「搗き臼」「磨り臼」「回転臼」と分類した。また、「回転臼」については、詳細な用語の整理や全国規模の資料検討を行なって変遷を推定し、以後の鉱山臼研究の指標となった。

さらに続いて山梨県で1989年から開始された湯之奥金山遺跡により、研究が加速する。櫛原功一は報告書の中で、今村の用語を踏襲しつつ鉱石粉砕具として出土資料を「鉱山用回転臼」「搗き臼」「磨り臼」「磨り石」とし用語の整理と分類を行っている。搗き臼は「ハンマー等で細かく砕くための臼で、敲打により形成される窪みをもつ」とされ、磨り臼は「鉱石を微粉砕する臼で携帯可能な小型、固定型とみられる大型タイプ、その中間タイプ」とさらに細分している。磨り石は「片手で使用し使用面を数面もつ小型タイプ、両手で一定方向で使用する大型タイプ」に細分している。また、同報告の中で回転臼を湯之奥型、リンズ型として識別し、「磨り臼はリンズのない回転臼に伴うか回転臼出現以前、湯之奥型とは共伴する可能性がある」として、磨り臼の時期的な位置づけを試みている（櫛原1992）。しかし、回転臼（挽き臼）についての十分な考察が加えられているものの、数量的に少なかった搗き臼については、明確化されていない。

1996年には『塩山市史』資料編が発刊され、その中で、今村啓爾と萩原三雄が黒川金山を取り上げ、遺物として「鉱石の粉砕に用いられた回転式の石臼、磨臼、磨石、凹石は発掘によって多数得られた」（今村・荻原1996）と触れている。細かい点ではあるが、送り仮名を省略した用語を使用し、遺物についての詳細な説明がないため、理由については不明であるが、混乱する一要素となっている。

続いて、黒川金山遺跡の報告書として『甲斐黒川金山』が1997年に発行され、今村が前筆論文を整理する形で鉱石粉砕具の位置づけを行っている。黒川金山の鉱石粉砕具を「凹み石」「A型磨り臼」「A型磨り石」「B型磨り臼」「B型磨り石」「回転臼」に分類し、凹み石は「直方体や楕円形の石塊のいくつかの面に普通一個づつ凹みを有する石。…大きさがほぼ一定しているので、両手で持ってハンマー代わりにしたのであろう」とし、1990年の論文で台石としたものを変更している。A型磨り臼は黒川千軒で一般的で「大きなものは中央部と周囲がやや高く残り、その間がドーナツ状に凹んでいる。小型のもので中央に凹みが一つのものもある。」もので、その対応品としてA型磨り石を見出し、「直方体に近い形の石の一面または二面に磨り面のある石。手で持ち、台になる石の上で鉱石をすり潰した」としている。B型磨り臼は「A型より小さく、凹みが深く明瞭で、磨面が非常に平滑である」とし、その対応品としてB型磨り石を「小型

で、磨面がカーブして幾つもあるので、全体がまるっこい形になっている」としている。また、回転式の臼を回転臼として詳細に分析し、把手のつけ方や供給孔内面の摩滅痕を重要視している。その上で、鉱石粉砕具の分類を行い、粗割用の「凹み石」「扣き石」、粗割・粉砕用の「搗き臼」、粉砕用の「磨り臼」「回転臼」とし、磨り臼を２細分、回転臼を５細分し、分布や変遷について述べた（今村1997)。磨り臼と磨り石を細分類し、その対応関係を推定しており、細分類を試みた点でおおいに評価できる。

1999年には、『塩山市史』通史編上巻が発行され、黒川金山の中で、「回転させながら微粉化していく挽き臼タイプの回転臼、磨りつぶしていくタイプの磨臼と磨石、鉱石を叩きながら砕いていく凹石などがある」(1999）と説明し、送り仮名が省かれているものの、使用方法を簡潔に明示した。また、これまでの回転臼を“挽き臼”と認識する方向性をうかがわせるものである。

2001年に行われた湯之奥金山博物館の公開講座で、谷口一夫は武田氏最大版図内金山道具一覧表を提示し、各金山でみられる道具類の有無をまとめている。その表中には「磨り臼・磨り石」「ひき臼」「たたき石」「搗き臼・搗き石」と分類している（谷口2005)。武田氏の最大版図内の金山で確認することができる石製の鉱石粉砕具がまとめられ、すべての用語が出揃う。しかし、凹み石が扱われていない点や「たたき石」の具体例は示されてはいない。

続いて2002年には、山梨県の金山金山遺跡の調査報告書が刊行され、網倉邦生が集落内の調査の中で、金鉱石を磨りつぶす際に用いた「金磨り臼」（網倉2002）として報告している。また、網倉は「回転臼」の変遷について把手形状の視点を入れて考察し、問題提起を行うとともに、「磨臼」の報告事例を集成して、平面形態や断面形態から大形、中形、小形の分類を行い、中形・小形の磨臼は新しい段階の可能性を示唆した。磨り臼の集成が行なわれ、形態による細分類を行っており、挽き臼とともに磨り臼について注目した点が評価できる。また、萩原三雄は山梨における金山研究史をまとめ、武田氏と金山のかかわりを明らかにした。その中で、「鉱石の粉成作業には、「搗く」「磨る」「回す」方法がある。従ってそれぞれの工程に必要な鉱山臼として「搗き臼」「磨り臼」「挽き臼」があり、これらの工程が複層的に採り入られていた。」(萩原2002）とし、工程差や使用法の差をコンパクトにまとめている。しかしながら、凹み石については触れられていない。

2004年には、『山梨県史』資料編が刊行され、山梨県内と近隣の鉱山資料が集成された。鉱山臼として、「挽き臼」「磨り臼」「搗き臼」（網倉・萩原2004）の用語が用いられ、挽き臼、磨り臼、搗き臼が用語として定着しつつあるように思われる。

回転臼は挽き臼とする見解が定着化しつつあり、その研究当初より研究が進み、型式の設定も進んでおり、変遷についても議論され、研究者によるぶれが少ないものと思われる。磨り臼、磨り石についても用語の一時的な混乱を除き、磨り面を有する点で一致し、両者が対応関係をもって磨り潰すための道具として認識されている。しかし、搗き臼・搗き石・凹み石・叩き石は資料数が少ない事に起因しているようであるが、積極的な議論が少ない。形態的に搗き臼と凹み石は区別する事が困難であると予想される点、凹み石と搗き臼が同一視できるか疑問を残す点、今村の規定する凹み石がハンマーとしての使用を想定しているが、叩き石とすべての凹み石が同一視できるか疑問が残る点などの問題点を残しているように思われる。これらは、必ずしも定形的な加工を必要とせず、使用することによって形成されると予想され、差異をつかみづらい事や、形態的な分類から用途を内包する用語へ変化しつつある事などが考えられよう。また、叩き石や搗き石を考える場合、鉱石粉砕具として石以外を素材とするものにも注意せねばならないが、具体的な出土例はこれまで見受けられない。

そこで、本遺跡から出土した鉱石粉砕具である挽き臼、磨り臼、磨り石、凹み石について形態、使用状

況などの観察によりそれぞれ分類を行って、磨り臼と磨り石の対応関係や、凹み石と使用法の差を含めたものとして認識されるであろう搗き臼や叩き石について考えてみたい。また、挽き臼について検討を加えることとする。

2　本遺跡の磨り臼・磨り石について

磨り臼は、大きさや凹面により、次のように分類することができた。

・磨り臼A類（第６図１～４）：大形で表裏両面に凹面が認められるもの。

・磨り臼B類（第６図５～７）：大形で凹面が一面のもの。

・磨り臼C類（第６図８～10）：小形で凹面が一面のもの。

・磨り臼D類：凹面が顕著ではなく、表裏両面からの使用があるもの。

磨り臼A類は４個体ある。本遺跡の場合、磨る作業が進行しており、すべてが破損している。楕円形に近い扁平な石が選択されているようであるが、凹面部の周辺に平坦な磨り面が形成されており、ある程度の厚みのある石が選択されていた可能性もある。磨り臼B類は、３点あり、凹面が一面であるためやはり十分な厚みがある。また、磨る作業が進行していないため、凹面部周辺に微細な凹凸があり、凹面と反対側が平坦ではない。磨り臼C類は、３点あり、他のものと比べるとかなり小形のものである。磨り臼D類は発掘調査の発端となったもので、かなりの大きさがあり、平たいものである。

磨り臼は、どれもほぼ中央部が凹面状にくぼみ、凹面だけでなくその縁にも磨き痕が観察され滑らかである。発掘調査のきっかけとなった大型の磨り臼も、両面に磨き痕が観察され、その作業が集中したと思われる部分がややくぼみをもっている。これらのことを考えると、今村が指摘する（今村1997）ように、凹面は厚みのある扁平状の石が使用により形成された形と考えられよう。ただし、B類にみられるような凹面部周辺の凹凸を考えると、すべてが磨る作業によるものではない可能性がある。

磨り石は17点出土しており、大型のものと小型のものが見られる。形態的特徴や磨面の観察から４分類することができた。

・磨り石A類（第７図１～４）

　断面形態がくさび形を呈する。磨り面はやや湾曲し、必ずしも滑らかな磨り面を持たないもの。

・磨り石B類（第７図５～９）

　断面形態がかまぼこ形に近く、平面形態が長方形を呈し、磨り面が一面のもの。

・磨り石C類（第７図10・11）

　断面形態が長方形に近く、磨り面が平らで比較的滑らかな磨り面を表裏若しくは一面に持つもの。

・磨り石D類（第７図12～15）

　よく磨かれた磨り面で滑らかであり、やや湾曲する。また、側面にも磨り面があるもの。

・磨り石E類（第７図16・17）

　小型で角錐状を呈し、底面に磨面があるもの。

磨り石A類は４点あり、中形のものに目立ち、花崗岩が目立つ。磨り方向は断面形態のくさび形の頂点に向かう形で観察されるものが多く、前述の中央部に凹面のある磨り臼でも使用可能であるが、適合するとは考えにくい。磨り石B類（５点）とC類（２点）についてもA類と同様に前述の磨り臼でも使用可能であるが、適合するとは考えにくい。この両者は、凹面に対しての使用が困難であり、磨り臼の方も平面的な場合に用いられたと考えられる。磨り石D類は４点で小形のものが目立ち、凹面を持つ磨り臼と適合するものと、必ずしも適合しないものとが見られる。磨り石E類は２点で他と比べ極端に小さいもので、

小型の磨り臼に適合するものと考えられる。

磨り臼B類・D類が使用の初期段階のものであり、平坦な部分の大きな時点において磨り石A類・B類・C類と適合する。そして使用が進行することによって磨り臼A類となり、磨り石D類が適合する。磨り臼C類と磨石E類は対応関係にあり、磨る対象物の大きさが小さいものであると想定できる。

3　本遺跡の凹み石について

凹み石は25点出土しており、特徴的と考えられる。大型のものと、小型のものに分類が可能である。また、形態的特徴などから４分類できた。

・凹み石A類（第８図１～５）

自然面や凹凸の顕著な平面が観察され、その中央部付近のみに凹部が観察されるもの。

・凹み石B類（第８図６～９）

立方体に近く、凹部付近のみに打痕が観察され、凹面が比較的深いもの。また、凹部を上に向けた場合必ずしも安定しない。

・凹み石C類（第８図10～13・第９図14～19）

両面あるいは一面が凹凸の細かい平面が観察され、凹部が浅いもの。

・凹み石D類（第９図20～25）

凹凸が微細な平面が観察され、わずかに凹部が観察されるもので、その平面を上に向けた場合安定しないもの。

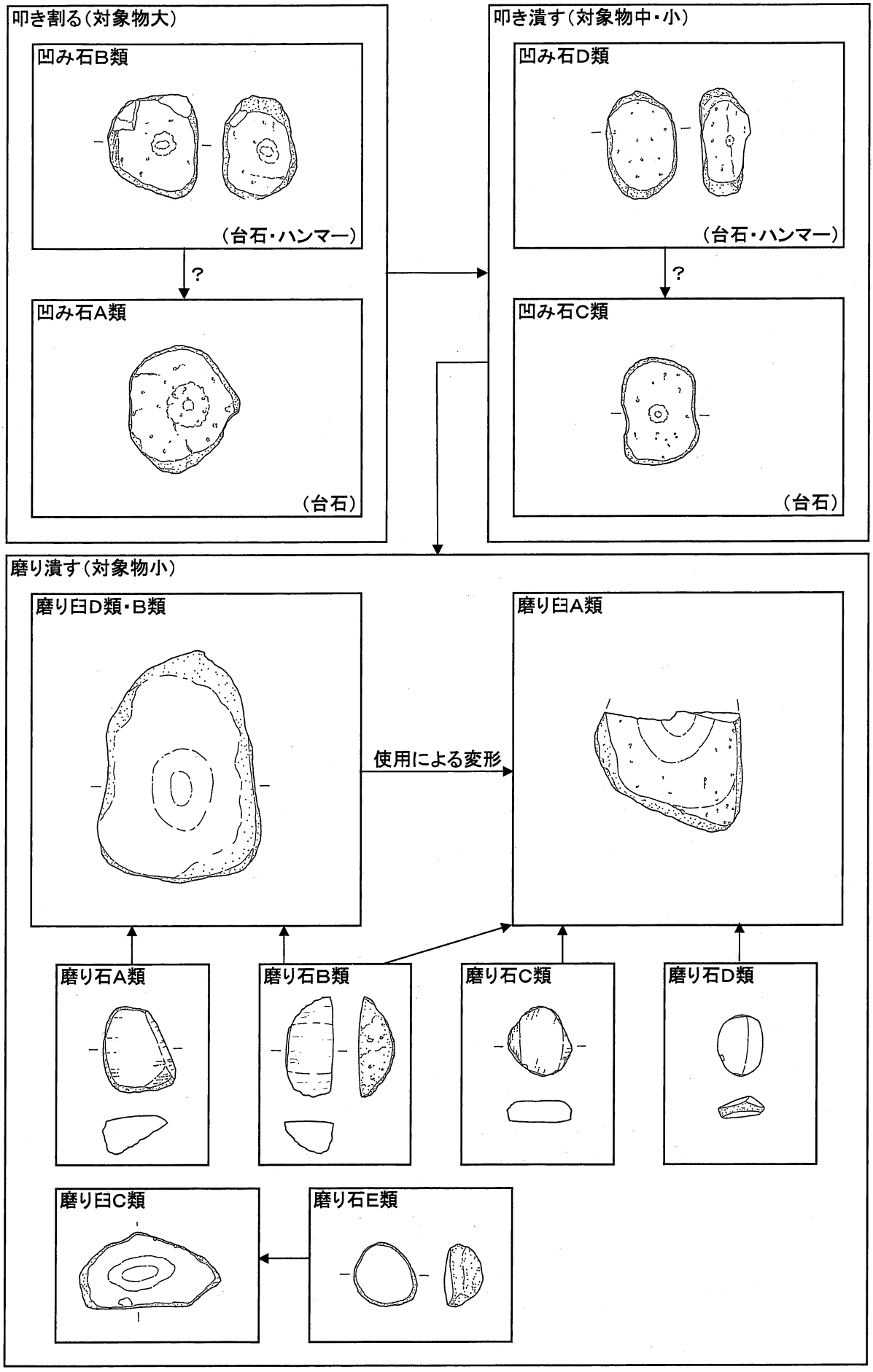
A類は、５点ある。平坦な自然面を利用し、中央部で敲く場所を固定的に行ったため凹部が形成されたと考えられる。凹部が比較的深い点や一面もしくは表裏二面にのみ凹部がある点に特徴がある。

B類は４点あり、当初より敲く場所を凹部付近に固定的に行ったものと考えられる。C類に比べ凹部が深いことにも特徴があり、凹部は表裏に限られていない。また、凹部を上にして安定しない点は、地中等に埋めて固定した場合と敲き落す場合とが考えられるが、後者は効率的ではないように思われる。

C類は10点で、自然面とは異なる平面が観察でき、凹部が浅い点に特徴がある。敲く場所を固定せずに使用し、結果として平面が形成されたか、意図的に平面を成形した場合が考えられる。形態的に黒川金山においてA型磨り臼と分類されているものに近い

D類は６点ある。凹部がかなり浅く、凹部を上にした場合の安定感がまったくない。また、磨り減ったかのような平面を形成している。磨り石的に用いながらも、敲打したため凹部が観察されるものかもしれない。

以上を考え合わせるとA類は大形で重量もあるため手に持っての使用は考えにくく、凹部で鉱石を粉砕する搗き臼的な用途が適当と思われる。しかし、山梨県で類例を見ることができず、検討を要するものである。B類も搗き臼的使用が考えられるが、今村が黒川金山の例で推定するハンマーとしての用途を考えても矛盾がない。C類は、凹部が浅く平坦面がみられる事などから、粉砕鉱石の大きさがA類よりは小さく叩き潰すための台石的な使用によるものではないかと思われる。D類は、鉱石の大きさを細かくするために使用した敲きながら磨り潰す作業用のハンマー的な用途の可能性が考えられる。A類とB類、C類とD類がセットの関係にあるかは不明であるが、何らかの関係にあった可能性もあろう。凹み石は、A類が搗き臼的使用、B類が叩き石的使用、C類が台石的、D類が叩き潰し的使用と考えられる。また、対象物がA類からD類に向って小さくなることが予想される。



第11図　粉砕過程と鉱石粉砕具

4　本遺跡の挽き臼について

今回の調査により、挽き臼の下臼が２点出土した。下臼であるため詳細な検討はできないが、軸穴は両者で対照的である。１点は軸穴が太くリンズを用いた挽き臼であり、もう１点は軸穴の細い挽き臼である。また、軸穴の細い挽き臼は軸山の形成が著しいもので湯之奥型とされる挽き臼で形成される可能性は低いものであり、軸山の形成を考えると黒川型やその改良形とされる長い軸の挽き臼、上臼のみにリンズを用いた挽き臼であったといえよう。そして、今村が指摘（今村1997）している黒川型挽き臼からリンズ型の挽き臼へと変遷し、リンズ型の中でも下臼の軸穴が太いものの方が改良型とされている点を考慮すると、黒川型挽き臼である可能性は低いものと考えられ、リンズが用いられた挽き臼である可能性が高いものと思われる。本遺跡の挽き臼はリンズを用いたものである可能性が高く、下臼にもリンズを用いた挽き臼がみられることになる。しかし、この挽き臼は使用が著しくない事を考えると軸穴の細い挽き臼が主体的に利用されていたものと思われる。

5　まとめ

鉱石粉砕具を分類し、用途を推定してきたので工程と粉砕具を概観しておきたい（第11図）。鉱石を粉砕していく場合、荒割の後、拳大の鉱石を凹み石Ａ・Ｂ類で粉砕、その後、凹み石Ｃ・Ｄ類で叩き磨り潰すように再粉砕し、さらに磨り臼による粉砕を行うと想定できる。また磨り臼はＢ類やＤ類が使用によりＡ類化していくものと思われ、磨り石Ａ類・Ｂ類と磨り臼Ｂ類・Ｄ類、磨り石Ｃ類・Ｄ類と磨り臼Ａ類が対応関係にあると考えられる。また、凹み石については、形態的な特徴から搗き臼、台石、叩き石、叩き磨り潰すなどの用途の微妙な違いがあり、転用が良くみられ、磨り石への転用、磨り石からの転用、あるいは、台石的に使用し平面化し搗き臼とする例も考えられる。また、本来は磨り石であるが、使用法によって僅かな凹みが形成される可能性もあろう。

第２節　他遺跡との比較と稼業時期

1　黒川金山遺跡、湯之奥金山遺跡との比較

本遺跡において鉱石粉砕具は、挽き臼が少なく磨り臼と凹み石を中心とする状況であり、石製以外の鉱石粉砕具は検出されなかった。

まず、発掘調査され報告書の刊行されている黒川金山遺跡と比較してみたい。黒川金山遺跡においては、磨り臼、凹み石を中心に黒川型の挽き臼がみられ、リンズ型の挽き臼は確認されていない（第12表）。本遺跡は、鉱石粉砕具の組成上からは黒川金山遺跡に近いものといえるが、挽き臼をみた場合リンズ型の挽き臼が本遺跡にみられる点が大きく異なる。地点別にみても傾向の大きな差は無いが、本遺跡の凹み石の数量がやや多い。また、凹み石や磨り石の様相がかなり近く、それぞれ本遺跡で試みた細分類が可能であるものと思われる。しかし、磨り臼については黒川金山のＡ型磨り臼が本遺跡ではみられない点が異なる。本遺跡とは組成や一部の磨り臼、凹み石の形態的な近似性がうかがえるものの、磨り臼や挽き臼において差異が認められる。

次にやはり報告書の刊行されている湯之奥金山遺跡と比較することとする。湯之奥金山遺跡と比較すると、鉱石粉砕具の組成が大きく異なる。湯之奥金山遺跡においては、挽き臼を主体に、磨り臼、１点のみの搗き臼が確認されている（第12表）。本遺跡においては、磨り臼、凹み石を主体とし、多くの凹み石が確認されている。そして、磨り臼は大形品、小形品の存在や両面の使用など形態的特徴も近似性がある。

第12表　黒川金山遺跡・湯之奥金山遺跡との比較

全体数比較	挽き臼			磨り臼	凹み石	陶器等の時期			
	黒川型	湯之奥型	リンズ型			15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
黒川金山遺跡	6	0	0	28	48				
湯之奥金山遺跡	0	8	99	21	1				
梓久保金山遺跡B	0	0	2	10	25				

地点比較	挽き臼			磨り臼	凹み石	陶器等の時期			
	上臼	下臼	計			15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
黒川金山A地点	3	2	5	12	11				
湯之奥金山A-22	21	3	24	9	0				
梓久保金山遺跡B	0	2	2	10	25				

相対的比較	挽き臼			磨り臼	凹み石	陶器等の時期			
	黒川型	湯之奥型	リンズ型			15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
黒川金山遺跡	○	—	—	◎	○	△	◎	△	△
湯之奥金山遺跡	—	○	◎	△	—	△	○	◎	△
梓久保金山遺跡B	—	—	○	◎	○	?	○	○	—
						◎	○	△	—
					主体性	大	→		無

しかし、湯之奥金山遺跡の搗き臼と本遺跡の凹み石A類を比較すると、湯之奥金山遺跡の例が、周囲を荒くではあるが加工している点、凹部のあり方も面的な凹みである点が異なり、加工の有無という点では本遺跡のものが初現的である。また、湯之奥金山遺跡においてはリンズ型挽き臼を中心に湯之奥型挽き臼がみられ、リンズ型の挽き臼がみられる点に近似性があるが、湯之奥型挽き臼は本遺跡で確認されていない点が異なる。

本遺跡は、磨り臼や凹み石を中心とする点で黒川金山遺跡に類似し、挽き臼は湯之奥金山遺跡に近い傾向であるといえ、鉱石粉砕具による単純な比較からは、黒川金山遺跡と湯之奥金山遺跡との中間的な様相と判断される。

2　本遺跡の稼業時期

鉱石粉砕具の比較からは、黒川金山遺跡に類似性が求められるもの、リンズ型の回転臼がみられる点で異なり、黒川金山遺跡の時期にやや遅れて並行するか後続する可能性が高いものと思われる。黒川金山遺跡においては、1530年（享禄３年）頃から数十年間繁栄し1577年（天正５年）頃から衰退していくとされており、本遺跡が1530年頃まで遡るのか、1577年以降かが大きな問題となる。

次に鉱石粉砕具以外の出土遺物から時期を推定してみることとする。陶磁器類は、古い時期のものは、16世紀後半で中国産と考えられるものであり、国内産は16世紀末から17世紀前半におさまる。土器類についても不明な点を残すものの16世紀後半が妥当と思われ、遺跡の時期は16世後半より古くなる可能性は低く、16世紀末から17世紀の可能性が強まる。また、銭貨に1606年（慶長11年）に鋳造されたとする慶長通宝が存在する点から1606年前後の可能性も高くなる。

文書類については、第１章で前述したので詳細は省くが、1558年（永禄元年）まで遡ることが可能で、1590年（天正18年）から1613年（慶長18年）頃がピークで1615年（元和元年）以降衰退した可能性が強いとみることができる。ただし、永禄と記載されている文書については原本にあたれない点と、明治３年に記されたということであり、不確定要素が多い点を考慮しなければならないと思われる。

これら鉱石粉砕具や陶器、銭貨、古文書を総合的に判断していくと、本遺跡は、古く見て天正年間（1573年から）であり、天正・慶長・元和年間（1573年～1624年）の中におさまるものと考えたい。

第３節　まとめと今後の課題

以上、発掘調査の結果から、特に鉱石粉砕具について考え凹み石の分類から、ある程度の粉砕工程を想定することができた。また､内容的には山梨県黒川金山遺跡の様相に近いことが想定されることとなった。稼業時期についても16世紀末から17世紀初めであり、黒川金山の研究と比較して、大きな矛盾が生じるものではなく、1577年（天正５年）に衰退したとされる黒川金山の金山衆の一部が他へその活動の場を移し、本村の長尾で活動を始めたとの見解にも矛盾しない結果である。

しかし､「武田晴信により始められた」とする伝承とは異なる結果となった。今回の調査は、発掘調査面積も狭く､地点的な調査であり､金山衆ごとの単位的な活動という今村の見解（今村1997）を考えると、梓久保金山遺跡の全体像に迫るものではない。したがって、当地域の稼業開始時期がさらに遡る可能性は十分あり、今後、この地点から北側にあるテラス群の本格的な調査が必要と思われる。また、今回の調査からは、天正年中に始まった長尾金山で梓千軒の伝承に迫るものであるが、長尾より以前から知られていたとされる名目金山と武田氏の関係が残されており、まったく別の地点で埋もれている場所がないか踏査する必要があろう。

また、今回は坑道について触れる事ができなかった、長尾を中心にかなりの坑道が存在することが知られており、今後、その調査が必要と思われることや、鉱石自体について検討することができず、その検討によってさらに本遺跡で出土した鉱石粉砕具が明確化されるのではないかと思われる。

そして､「梓千軒」については本遺跡や文献資料を初め整いつつあるが､「川端下千軒」については、文献資料が不足していることや、本遺跡のような場所が特定されていないなど、多くの問題が手つかずのまま残されている。やはり、両者の関係や内容の比較を可能にすることが必要であり、川端下側の調査を進めることが必要とされる。

引用・参考文献

網倉邦生　2002「第Ⅳ章　第５節　周辺調査の概要」『金山金山遺跡』　山梨県教育委員会・山梨県土木部　40～54頁

網倉邦生・萩原三雄　2004「第四章　第三節　鉱山」『山梨県史』資料編７中世４考古資料　山梨県　537～567頁

今村啓爾　1990「鉱山臼からみた中・近世貴金属鉱業の技術系統」『東京大学考古学研究室研究紀要』第９号　東京大学文学部　25～74頁

今村啓爾・萩原三雄　1996「第１章　第５節（２）鉱山遺跡」『塩山市史』資料編第１巻　原始・古代・中世　塩山市　217～234頁

今村啓爾　1997「付篇４　黒川金山の石製鉱石粉砕具の位置づけ」『甲斐黒川金山』　塩山市・塩山市教育委員会　付篇38～50頁

今村啓爾　1999「第３章　第５節　黒川金山と金山衆」『塩山市史』通史編　上巻　塩山市　393～427頁

今村啓爾　1997『戦国金山伝説を掘る』平凡社

梅原康嗣　2002「第５章　第６節　鉱業」『南佐久郡誌』近世編　南佐久郡誌刊行会　729～758頁

川上村誌刊行会　1986『川上村誌』民俗編　川上村誌刊行会　245～252頁

川上村誌刊行会　1992「第Ⅲ章　川上村の自然」『川上村誌』先土器時代編　川上村誌刊行会　61～77頁

川上村誌刊行会　1994『川上村誌』資料編　大深山・原林野保護組合文書　川上村誌刊行会　310頁

川上村誌刊行会　1996『川上村誌』資料編　梓山　川上澄雄家文書　下　川上村誌刊行会　941～944頁

川上村誌刊行会　2000『川上村誌』資料編　川上百樹家文書　下・林亀美夫家文書　川上村誌刊行会　258～271頁

川上禮三　1979「第１章　前代までの概観」『秋山村史』　川上禮三　３～42頁

櫛原功一　1992「第４章　第３節　２.鉱石粉砕具」『湯之奥金山遺跡の研究』　湯之奥金山遺跡学術調査会　99～125頁

櫛原功一　1992「第２編　第１章　中山金山遺跡の鉱山臼」『湯之奥金山遺跡の研究』　湯之奥金山遺跡学術調査会　197～203頁

黒川金山遺跡研究会　1997『甲斐黒川金山』　塩山市・塩山市教育委員会

小葉田淳　1968『日本鉱山史の研究』岩波書店（1995再版）286～318頁

桜井英治　1997「第三部　第三章　古文書からみた黒川金山と金掘」『甲斐黒川金山』　塩山市・塩山市教育委員会　208～259頁

信濃史料刊行会　1965『信濃史料』第23巻　信濃史料刊行会　612～616頁

島田恵子　1994「川上村における金山開発の歴史㈠中世―古文書を中心として―」『佐久』13号　佐久史学会　１～17頁

谷口一夫　2005「挽き臼の特質と実際」『金山史研究』第５集　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館　57～67頁

長野県南佐久郡誌編纂委員会「第１章　地形・地質」『南佐久郡誌』自然編(上)　長野県南佐久郡誌刊行会　３～494頁

日本金山誌編纂委員会　1994「89　金峰（甲武信）鉱山」『日本金山誌』第４編　関東・中部　157～158頁

萩原三雄　2002「第１部　第３章　甲斐の金山と武田氏」『定本・武田信玄』21世紀の戦国大名論　高志書院　65～96頁

萩原三雄　2005「甲斐金山研究の展望」『金山史研究』第５集　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館　219～235頁

原田明　2003「甲武信（金峰）鉱山・国師鉱床産出の鉱物について」金属鉱山研究会資料

原田明　2006「山金鉱床と金鉱石に関する一考察」『金山史研究』第６集　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館　13～21頁

南佐久郡誌編纂委員会　2002『南佐久郡誌』近世編　南佐久郡誌刊行会　３～158頁、729～739頁

山梨県埋蔵文化財センター　2002『金山金山遺跡』　山梨県教育委員会・山梨県土木部

湯之奥金山遺跡学術調査団　1992『湯之奥金山遺跡の研究』湯之奥金山遺跡学術調査会

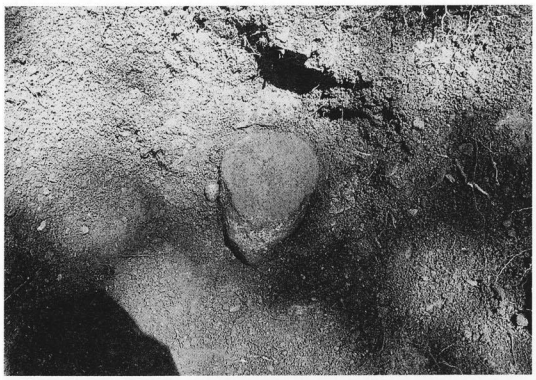
遺跡遠景（南東から）

長尾・地獄谷遠景（遺跡対岸）

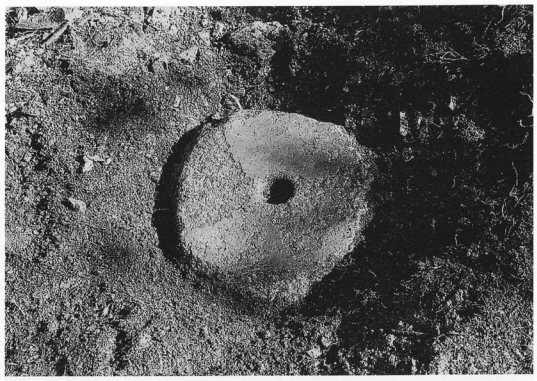
磨り臼出土状況

磨り石・凹み石出土状況

挽き臼出土状況

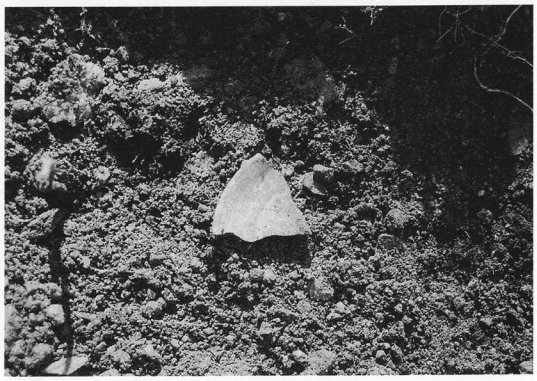


凹み石出土状況



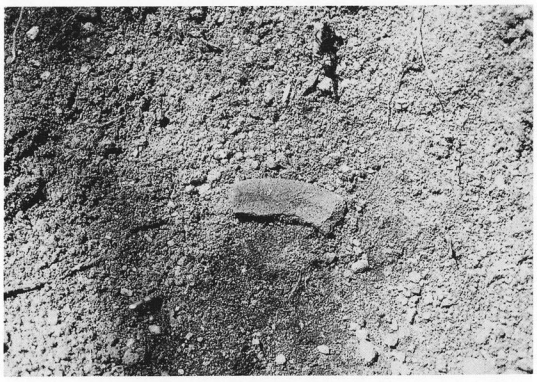
挽き臼出土状況

陶器片出土状況



陶器片出土状況

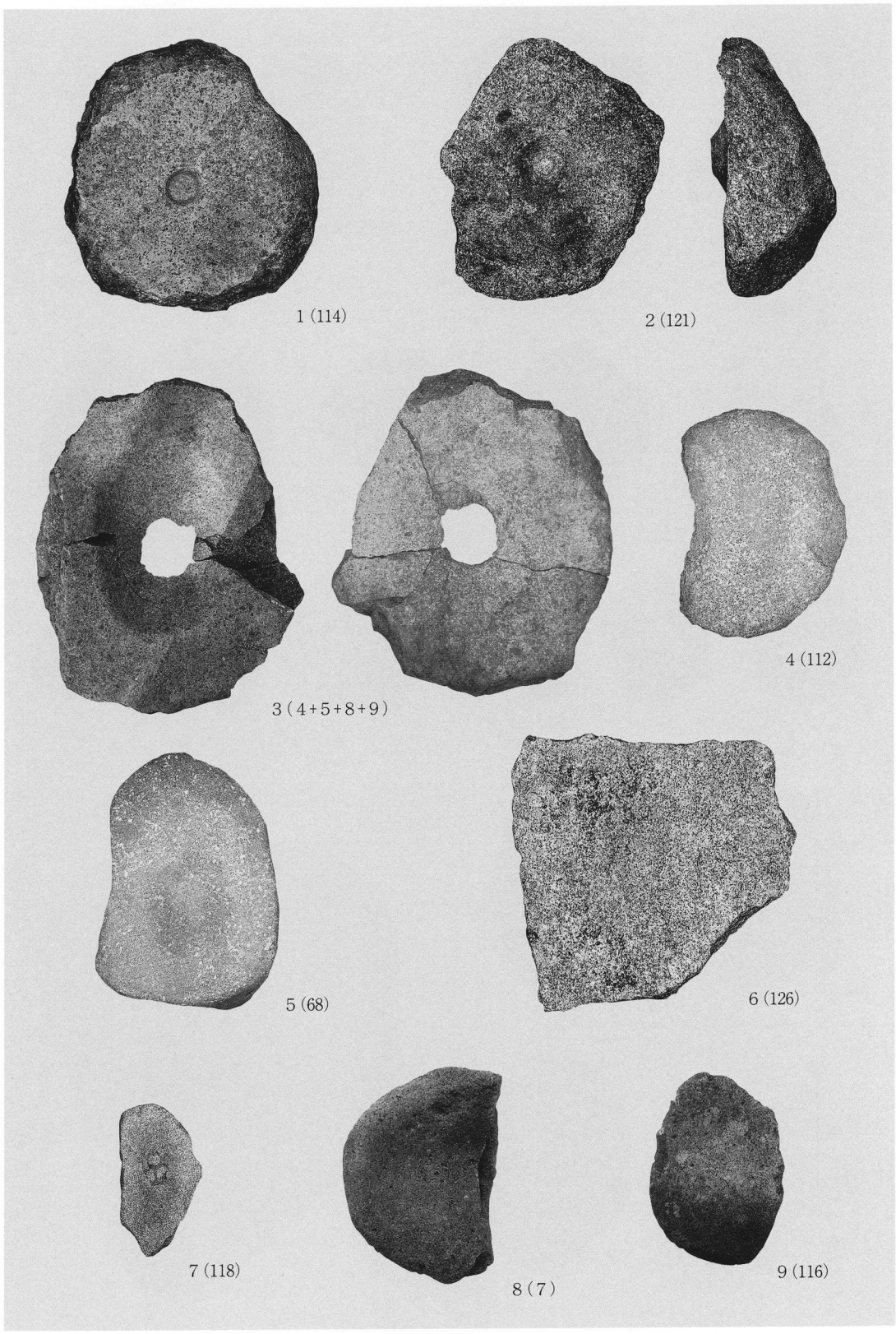
銭貨出土状況



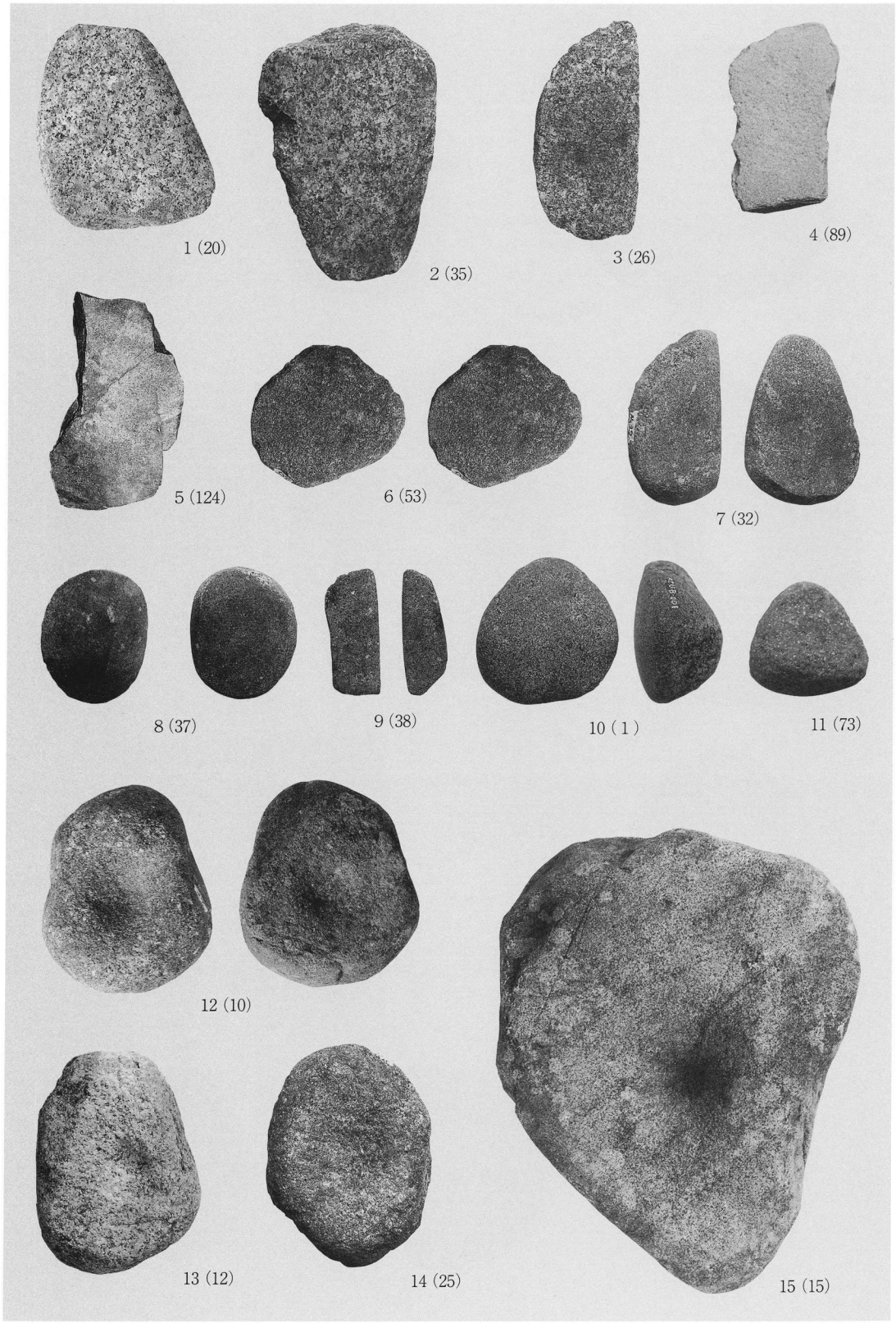
カワラケ出土状況

遺跡遠景（北西から）

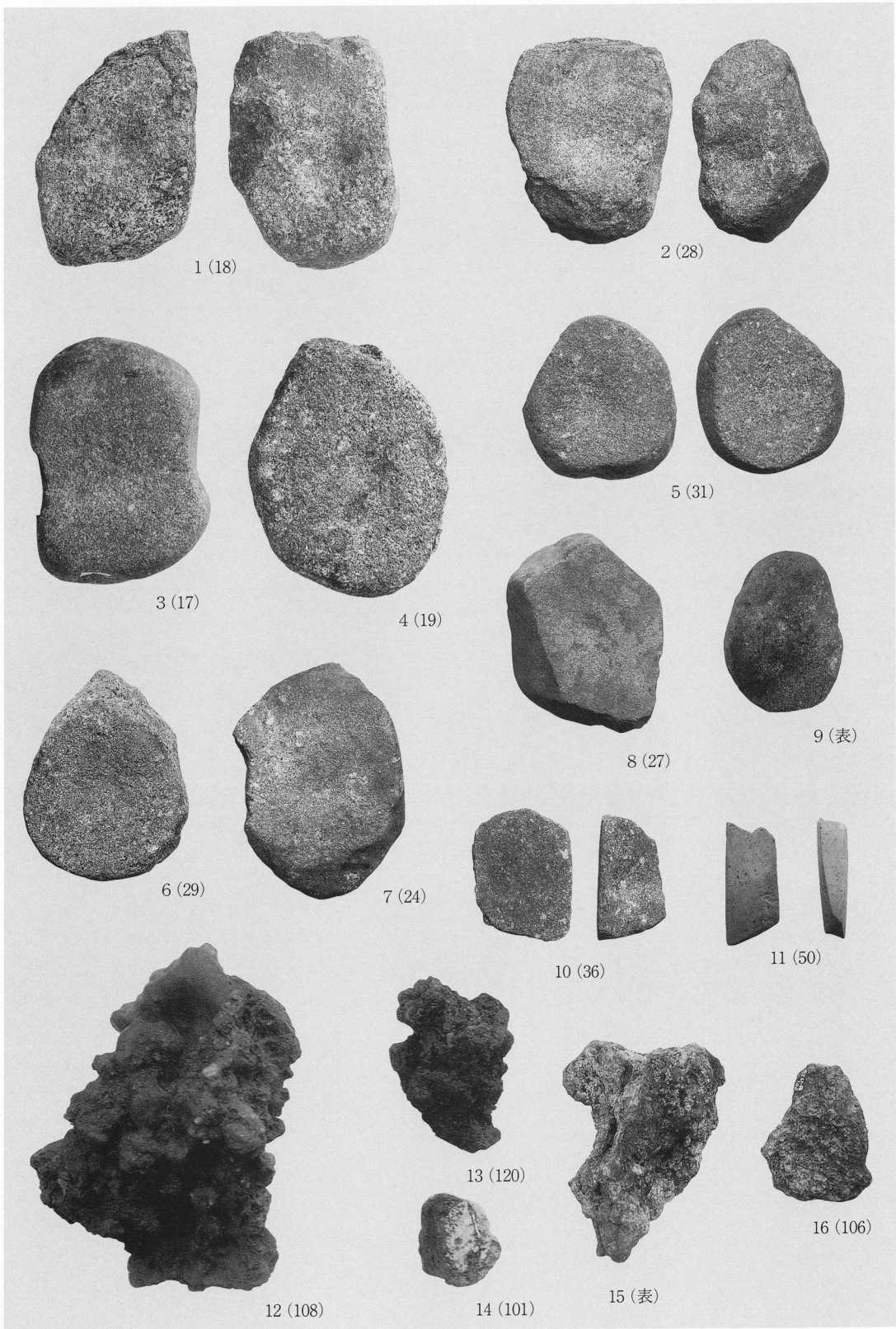
遺跡遠景（北から）



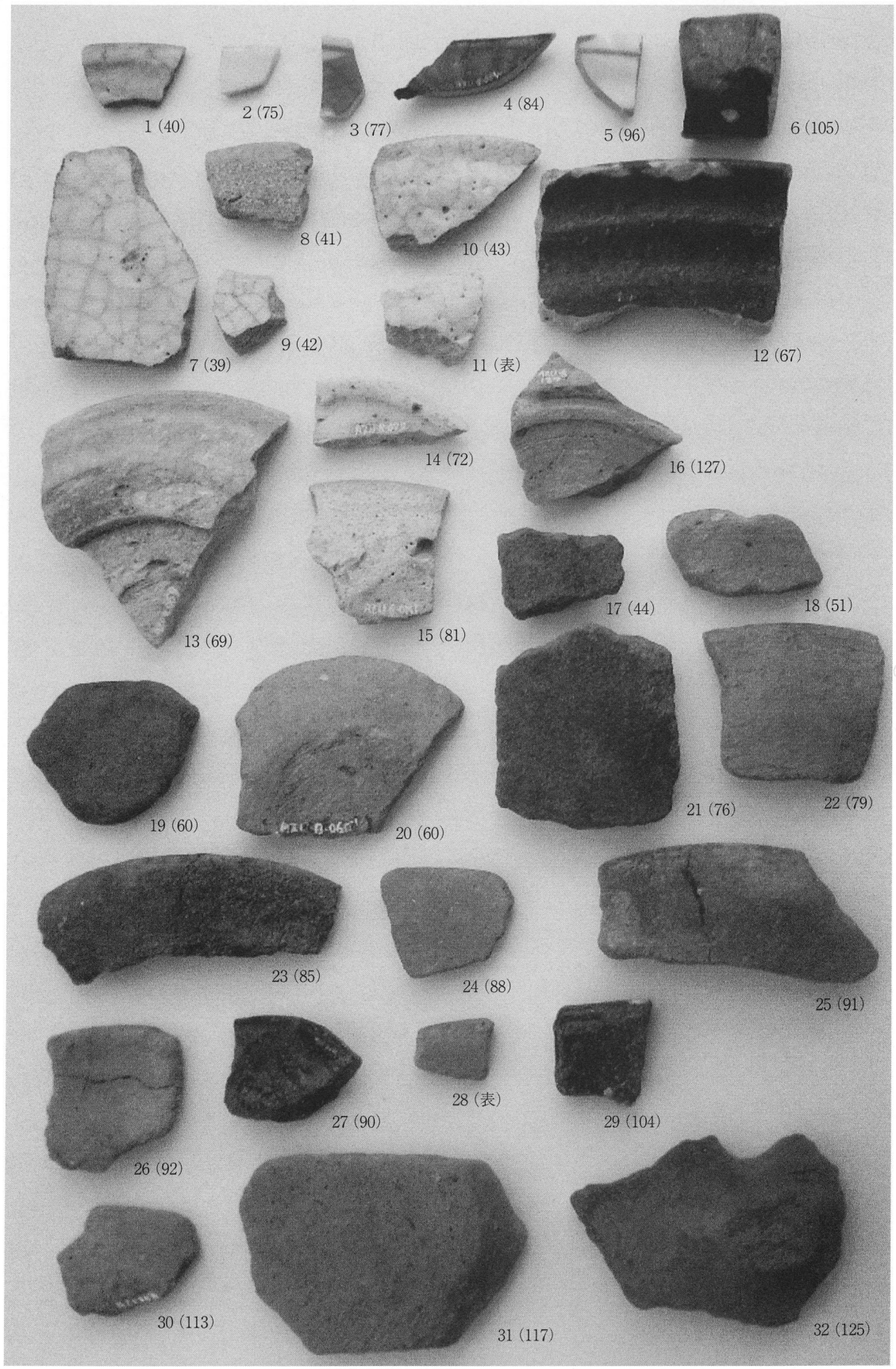
挽き臼・磨り臼（1～7　1/10、8・9　1/3）



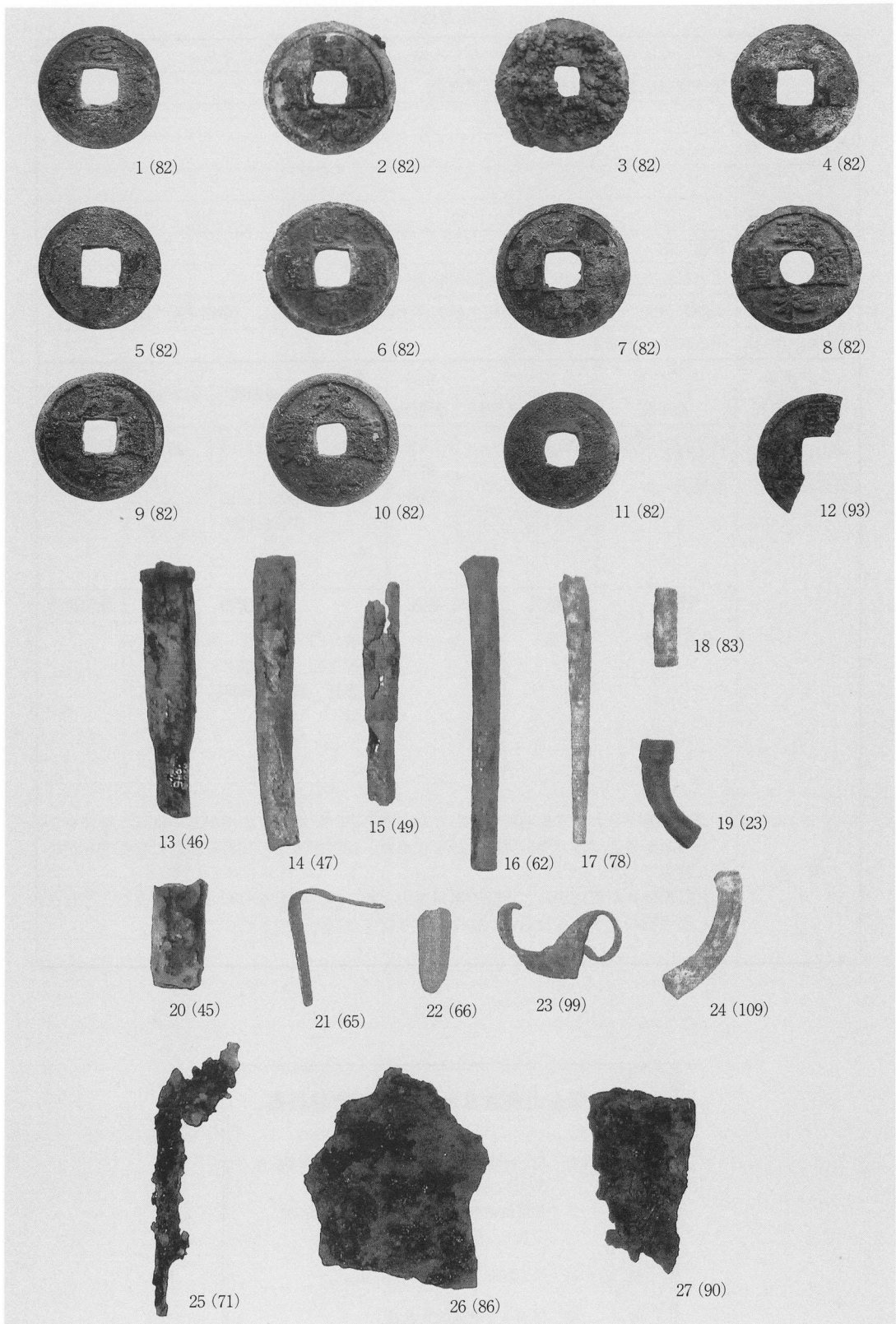
磨り石・凹み石（1～9、12～15　1/5、10・11　1/2）



凹み石・その他鉱石粉砕具・砥石・鉱滓・ゆり滓（1～10　1/5、11～16　1/2）



磁器・陶器・土器（1～32　1/1）



銭貨・煙管・銅鉄製品（1～27　1/1）

報告書抄録

ふりなが	あずさくぼきんざんいせきびーちてんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	梓久保金山遺跡Ｂ地点発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	長﨑　治
編集機関	川上村教育委員会・川上村文化財保護委員会
所在地	〒384-1405　長野県南佐久郡川上村大字大深山532　　ＴＥＬ　0267－97－2600
発行年月日	平成20年（2008年）３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 新測地	東経 新測地	調査期間	調査面積	調査原因
あずさくぼきんざん 梓久保金山 いせきびーちてん 遺跡Ｂ地点	かわかみむらおお 川上村大 あざあきやま 字秋山	52-1	203041	57	35度 56分 05秒	138度 40分 33秒	2003.11.14 ～ 2006.11.10 （内11日間）	90㎡	学術調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生産関連	近世	なし	磨り臼・磨り石・凹み石 挽き臼・陶磁器片・土器片 銭貨・煙管・銅製品・鉄製品 等	

要約

磨り臼を中心とする鉱石粉砕具とともにゆり滓、鉄滓などを検出し、鉱石の粉砕をなした場所が確認でき、陶器等による年代から、15世紀末から16世紀初めに稼業された場所と推測できた。

鉱石粉砕具や年代から、山梨の黒川金山と深い係わりをもつものである点や、これまで、出土例の少なかった凹み石について考察することができた。

梓久保金山遺跡Ｂ地点発掘調査報告書

編集・発行　川上村教育委員会・川上村文化財保護委員会
〒348-1405
長野県南佐久郡川上村大字大深山532
ＴＥＬ　0267－97－2600

発行日　平成20年（2008年）３月20日

印刷　ほおずき書籍株式会社